

# 左沢楯山城跡調査報告書 (12)

史跡左沢楯山城跡 第1期保存整備に伴う確認調査報告書 (1)

2012年3月

大江町教育委員会



あてらざわたてやまじょうあと  
**左沢楯山城跡調査報告書（12）**

史跡左沢楯山城跡 第1期保存整備に伴う確認調査報告書（1）

平成24年3月

大江町教育委員会





C 1 調査区 SD1411 (西から)



史跡左沢楯山城跡遠景 (南から)



## 序

本書は、平成23年度に実施した史跡左沢楯山城跡確認調査の概要をまとめたものです。

左沢楯山城跡は、平成5年から調査を実施し、平成21年2月に国史跡の指定を受けました。

平成22年に策定した「大江町教育基本計画」では、史跡左沢楯山城跡保存管理計画に基づき、指定区域の公有化や保存会の立ち上げを図るなど、史跡としての価値の保存を前提としたうえで、「町の宝」として利活用を図るための保存・整備を進めることが定められました。地元においても「山城サミット」などの取組みを通して、城跡への関心が高まってまいりました。

これらを背景として左沢楯山城跡の保存・活用に対する機運が盛り上がり、大江町教育委員会ではワークショップを通して町民の意見を集約するとともに、専門家による保存整備検討委員会を設置してご指導をいただきながら、平成24年3月に史跡左沢楯山城跡の保存整備基本構想を策定したところでございます

それと併行して平成23年度から、保存整備を実現するために左沢楯山城跡の発掘調査を再開することとしました。

本書では、第1期保存整備を目的として計画した発掘調査の、初年度として実施した八幡座地区と蛇沢地区の調査概要について報告いたします。

現在、大江町では町全域を対象として、文化的景観の保護推進事業を実施しております。史跡左沢楯山城跡は、西村山郡の歴史を知るのに欠かせない貴重な遺跡であるとともに、歴史の積み重ねにより形成された、本町特有の重層的な景観にとっても欠かせない「町の宝」です。私たちはこの貴重な史跡を、町の誇りとして次代へと大切に受け継がなければなりません。本書をその一助としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました関係各位に、心から感謝申し上げます。

平成24年3月

大江町教育委員会

教育長 富樫 是行

# 例 言

1 本報告書は平成23年度に大江町教育委員会が国庫補助を受けて実施した、国指定史跡左沢楯山城跡の確認調査報告書である。

2 事業期間は平成23年4月1日から平成24年3月31日までである。

3 調査体制は以下のとおりである。

調査主体 大江町教育委員会 教育長 富樫 是行

調査員 佐藤 庄一（山形考古学会 副会長 調査主任）

茨木 光裕（日本考古学協会 会員）

菊地 泰子（大江町教育文化課 主事）

作業員 剣持 行史、公平 俊次、佐竹 与惣治、杉原 範美、林 與惣次、森谷 康平

事務局 大江町教育委員会

松田 健一（教育文化課長）

結城 順二（教育文化課社会教育・歴史文化・体育振興主幹）

櫻井 洋志（教育文化課歴史文化主査）

京谷 潤（教育文化課歴史文化係長）

菊地 泰子（教育文化課 主事）

4 本調査にあたって史跡左沢楯山城跡保存整備検討委員会を組織し、指導と助言をいただいた。委員等は以下のとおりである。

委員長：伊藤 清郎

オブザーバー：川崎 利夫、横山 勝栄

委員：阿子島 功、大場 雅行、金山 耕三、佐藤 庄一、田中 哲雄、宮本長二郎、吉野 智雄

（五十音順、敬称略）

5 本調査で行なった委託業務は以下のとおりである。

遺構測量及び図化業務 株式会社 寒河江測量設計事務所

放射性炭素年代測定業務 山形大学 高感度加速器質量分析センター

6 本調査の出土遺物・調査記録類は大江町教育委員会で保管している。

7 本調査を実施するにあたり、次の方々にご指導・ご協力をいただいた。記して感謝を申し上げます。

文化庁、山形県教育庁文化財保護推進課、山形県埋蔵文化財調査研究センター

大場 正善、佐藤 正知、渋谷 孝雄、高桑 登、竹田 純子、門叶 冬樹、長橋 至、野川 木綿子、福田 正宏、水ノ江 和同

（五十音順、敬称略）

8 本書の編集・執筆は、全体については佐藤庄一氏と茨木光裕氏、史跡左沢楯山城跡整備検討委員会に助言とご指導をいただき、遺物については財団法人山形県埋蔵文化財センターの高桑登氏、大場正善氏に助言とご指導をいただいて菊地泰子が担当、遺物の実測・拓本は櫻井洋志・菊地泰子が担当した。

また、「史跡左沢楯山城跡外郭トレンチ試料3点の年代測定結果」は山形大学高感度加速器質量分析センターの門叶冬樹氏ほかが執筆し、委託業務で町に提出いただいた報告書を転載した。

# 凡 例

- 1 本書の挿図は縮尺が不統一であり、各図にスケールを示した。
- 2 本書で使用した座標値は、世界測地系平面直角座標第X系による。高さは標高で示し、方位は座標北を示す。なお、本調査は平成23年3月11日の東北地方太平洋沖地震以降に実施したが、地震前の与点成果をもとに座標及び標高の計算を行なって、その値を使用している。
- 3 本書における土層の色調記載は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の2006年版『新版基準土色帳』による。
- 4 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は以下のとおりである。  
S B…建物跡      S D…溝跡
- 5 B 3は蛇沢の調査区を示す。過去に調査が行なわれた八幡座は、前回の調査区名称を継承してC 1と示す。Tは調査区内におけるトレンチを示す。また、「八幡座地区」、「蛇沢地区」などの地区名称は、『史跡左沢楯山城跡保存管理計画書』による。

# 目次

序	
例言	
凡例	
目次	
I 調査の目的	1
1 調査の目的	
2 保存整備に伴う発掘調査の計画	
II 遺跡の立地と環境	2
1 左沢楯山城跡の立地	
2 城の構造	
3 歴史的環境	
III 八幡座地区の確認調査	7
1 調査の概要	
(1) 調査の経緯	
(2) 調査の方法と経過	
2 調査の成果	
(1) 概要	
(2) 遺構	
(3) 遺物	
IV 蛇沢地区の試掘調査	17
1 調査の概要	
2 調査の成果	
(1) 遺構	
(2) 遺物	

史跡左沢楯山城跡外郭トレンチ試料3点の年代測定結果

図版  
報告書抄録  
文献

# 挿図目次

第1図	左沢周辺の中世城館跡分布図	3
第2図	左沢周辺の近世の主な道と河川	3
第3図	左沢楯山城跡縄張図	4
第4図	左沢楯山城跡航空写真	4
第5図	左沢楯山城跡調査区位置図	8
第6図	平成13年度C1調査区平面図・土層断面図	9
第7図	平成13年度の調査	9
第8図	C1調査区平面図	11
第9図	平成23年度C1調査区調査風景など	11
第10図	C1調査区土層断面図	12
第11図	C1調査区北部遺構平面図・遺構断面図	14
第12図	C1調査区南部遺構平面図・遺構断面図	15
第13図	C1出土遺物実測図	16
第14図	平成23年度B3調査区調査風景	19
第15図	B3調査区2T平面図・土層断面図	20
第16図	B3調査区1T・3T平面図・土層断面図	21
第17図	B3調査区出土遺物実測図	22

# 表目次

第1表	これまで行なわれた調査	1
第2表	年表	6
第3表	遺構番号対応表	10
第4表	蛇沢地区設置4級基準点座標	17

# 図版目次

写真図版1	C1調査区全景
写真図版2	B3調査区立地状況
写真図版3	C1調査区写真
写真図版4	B3調査区写真
写真図版5	平成23年度調査出土遺物

# I 調査の目的

## 1 調査の目的

本調査は、国指定史跡左沢楯山城跡の保存と整備を目的として、史跡の内容を確認するために行なったものである。

これまで、平成5年度は「左沢楯山城跡調査検討委員会」、平成6年度からは「左沢楯山城跡関連調査検討委員会」が中心となり、平成10年度からは大江町教育委員会が主体となって左沢楯山城跡関連の調査が行なわれた（第1表）。平成21年2月12日に字元屋敷、字楯山、字裏山の246,882.72㎡が、文化財保護法の規定により国指定史跡となり、翌年2月22日には「寺屋敷」周辺の1,629㎡が追加指定を受けた。

大江町教育委員会では、平成21年に史跡左沢楯山城跡保存管理検討委員会を設置。平成22年3月に『史跡左沢楯山城跡保存管理計画』を策定し、同年9月、史跡指定地を「左沢楯山城史跡公園」とする大江町史跡公園の設置及び管理に関する条例を制定した。平成22年度からは、史跡地内の公有化事業を進めている。

このような動きの中で、広く史跡を見学できるような整備を望む機運が高まり、平成22年に史跡左沢楯山城跡保存整備検討委員会を設置。保存整備基本構想を検討しながら、同委員会及び文化庁、山形県にご指導を仰ぎ、保存整備のための調査に着手した。

## 2 保存整備に伴う発掘調査の計画

大江町教育委員会では、史跡の公開に必要な措置として動線の設定と安全確保、並びに地形や立地を利用した山城跡景観の整備などを第1期整備として検討している。これらを実現するため、平成23年度から平成26年度の4カ年で、史跡左沢楯山城跡第1期保存整備に伴う発掘調査を計画した。主要な曲輪における虎口の確認や動線の設定を予定する場所における遺構の確認などが目的である。

本書では、調査計画の一環として平成23年度に実施した、蛇沢地区と八幡座地区における調査の概要について報告を行なう。なお、平成26年度に、4カ年にわたる第1期保存整備のための調査の報告を予定する。

第1表 これまで行なわれた調査

年	調査の内容			
	縄張調査	発掘調査	遺構	遺物
1993	文献調査：「金仲山眼明阿弥陀尊略縁起」・「天文本大江系図」・「性山公治家記録」・「天正二年伊達輝宗日記」・「最上義光分限帳」			
1994	文献調査：「羽州川通絵図」・「左澤絵図面」・「左澤御領内御絵図」			
1995	元屋敷	八幡座：50㎡	柱穴跡	
1996		八幡座C6・7：160㎡	柱穴跡・溝跡	
1997		千畳敷B1：144.25㎡	柱穴跡・溝跡	
1998	千畳敷、寺屋敷	千畳敷B1・堀切：540㎡、 寺屋敷C8：465㎡	柱穴跡・溝跡・堀跡	近世陶磁器
1999	八幡平、寺屋敷	寺屋敷C8：465㎡	柱穴跡・溝跡	近世陶磁器・鉄製品
2000	八幡座	寺屋敷C8：465㎡	柱穴跡・溝跡・石組	須恵器・中世磁器 近世陶磁器・鉄製品
2001	北外郭	八幡座C1、2、3：208㎡、 寺屋敷C8：150㎡	柱穴・溝・石組	近世陶磁器・砥石 硯・鉄製品
2002	裏山	八幡座C4、5：209.25㎡、寺屋敷C9：300㎡	柱穴跡・土坑	
2003	裏山	寺屋敷C9：660㎡、八幡平B2：50㎡	柱穴跡・布堀	
2004	裏山	八幡座C11、12・13、16、17、19：396.5㎡、 寺屋敷C20：50㎡	柱穴跡・小竪穴	近世陶磁器・鉄製品
2005	裏山	寺屋敷C8：62㎡	柵跡・溝跡・柱穴跡	近世陶磁器・鉄製品
2006	裏山	元屋敷C1：65㎡	柱穴跡・溝跡	中世磁器・近世陶磁器・鉄製品
2007	裏山	元屋敷C1：100㎡	柱穴跡・溝跡	中世磁器・近世陶磁器・鉄製品
2008		元屋敷C2、3：37㎡	柱穴跡・溝跡	中世磁器・近世陶磁器

## Ⅱ 遺跡の立地と環境

### 1 左沢楯山城跡の立地

史跡左沢楯山城跡は山形県西村山郡大江町大字左沢字元屋敷、字楯山、字裏山に所在する。大江町は山形県のほぼ中央で、西の朝日連峰から山形盆地の西縁部に広がる。左沢は町の東端で、最上川と月布川合流点付近の低位段丘上に位置し、市街地が集積している。城跡は市街地の北側で、標高約 220 m の丘陵に立地する。

楯山周辺の地層は、ほとんどが泥岩、砂岩、凝灰岩などからなっている。下位から第三紀中新世の葛沢層、大谷層、第三紀鮮新世の左沢層(稲沢山砂岩層部、左沢炭部層)である(山形県 1986)。楯山の上部付近は、稲沢山から連続している砂岩及び細礫を含む稲沢山砂岩部層で、「八幡平」から楯山公園付近に露出している地層は、固結度の低い砂岩である(阿子島 2010)。

大江町を流れる最上川は、上流の置賜から五百川峡谷を北流し、左沢の東端を流れている。城跡がある楯山の山塊にぶつかって、その麓で流れの向きを東に変えて村山盆地に流れ出る。楯山は標高 222.13 m で、麓を流れる最上川(標高約 100 m)と約 120 m の比高差がある。

大江町では、現在 30 カ所の中世城館跡が確認されている。村山地方の中世城館跡については、六十里越街道や最上川などの主要道や河川沿いに多く分布していることが知られている(大場 2002、第 2 図)。また、近世最上川舟運の河岸・船着き場の所在地には、左沢楯山城跡を含めかなりの確率で中世城館が存在しており、中世、すでに多くの津が成立して、水運の展開の基礎になっていた可能性が指摘されている(市村 2002)。

近世の左沢には、最上川舟運の河岸があった。左沢楯山城跡が最上川舟運を掌握したことを示す証拠は確認されていないが、最上川に近接する立地であり、川を眼下に見下ろす「千畳敷」では、掘立柱建物跡が確認されている。城が最上川舟運を押さえ、かつ非農業的活動も押さえる役割を果たしていた可能性が示唆されている(伊藤 2007)。

『左澤御領内御絵図』(天保 9 年)では、最上川左岸を置賜へ延びる道(西部街道)、楯山麓から寒河江へ至る道、最上川を渡河して山形へ至る道、大江町西部から六十里越街道へ至る道などが、楯山麓に広がる低位段丘で交差している(第 3 図)。左沢は、置賜から村山への往来における交通の要衝であった。

左沢楯山城跡が機能した時代には、置賜は伊達氏(後に上杉氏)、山形は最上氏が治めていた。また、寒河江には寒河江大江氏の本城寒河江城、大江町西部には大江氏の家臣の城館が分布している。

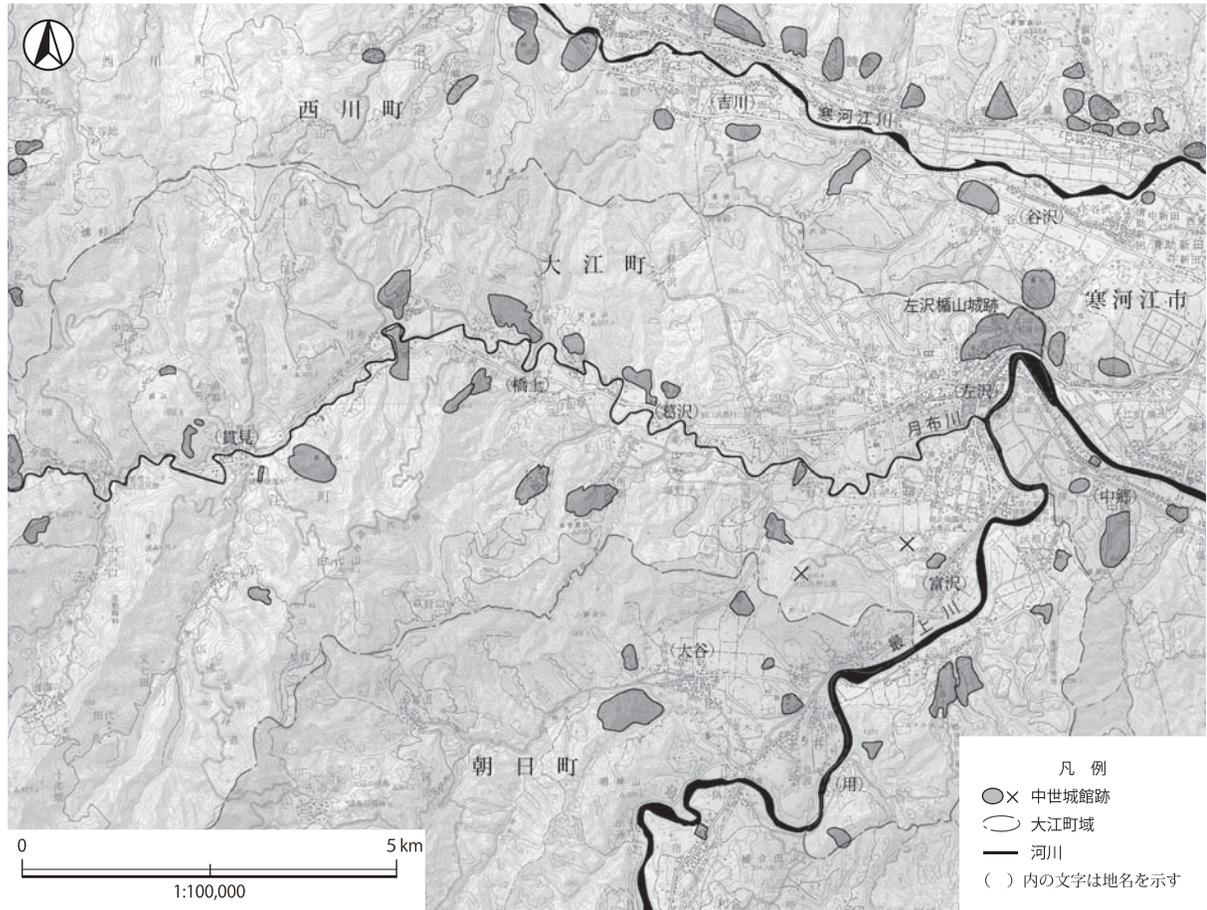
### 2 城の構造(第 4 図)

これまでの調査で、左沢楯山城は東西 480 m ほどの規模であることが分かっている。城の南側は、最上川に面した急崖が形成されている。東側と北側は檜木沢の深い溪谷が、城と城東側の平野山や鏡山とを隔てている。これらが城の南、東、北側の防御をかたちづくる。

城は天然の沢(蛇沢)を取り込んだ構造である。この沢によって、城の最頂点を有する北部の丘陵と、最上川に面した南部の丘陵に分けることができる。

城跡北部の丘陵では、縄張調査で多数の曲輪が確認されている。城の最頂点である「八幡座」のすぐ下に位置する「ゴホンマル」と呼ばれる曲輪では、発掘調査で主殿と推定される掘立柱建物跡が検出された。「八幡座」とその周辺をとりまく曲輪一帯が、城の中核を成したと考えられている。丘陵の東部には「寺屋敷」と呼ばれる、城内最大の面積を誇る曲輪が存在し、発掘調査で大型の掘立柱建物跡や石組遺構が確認されている。

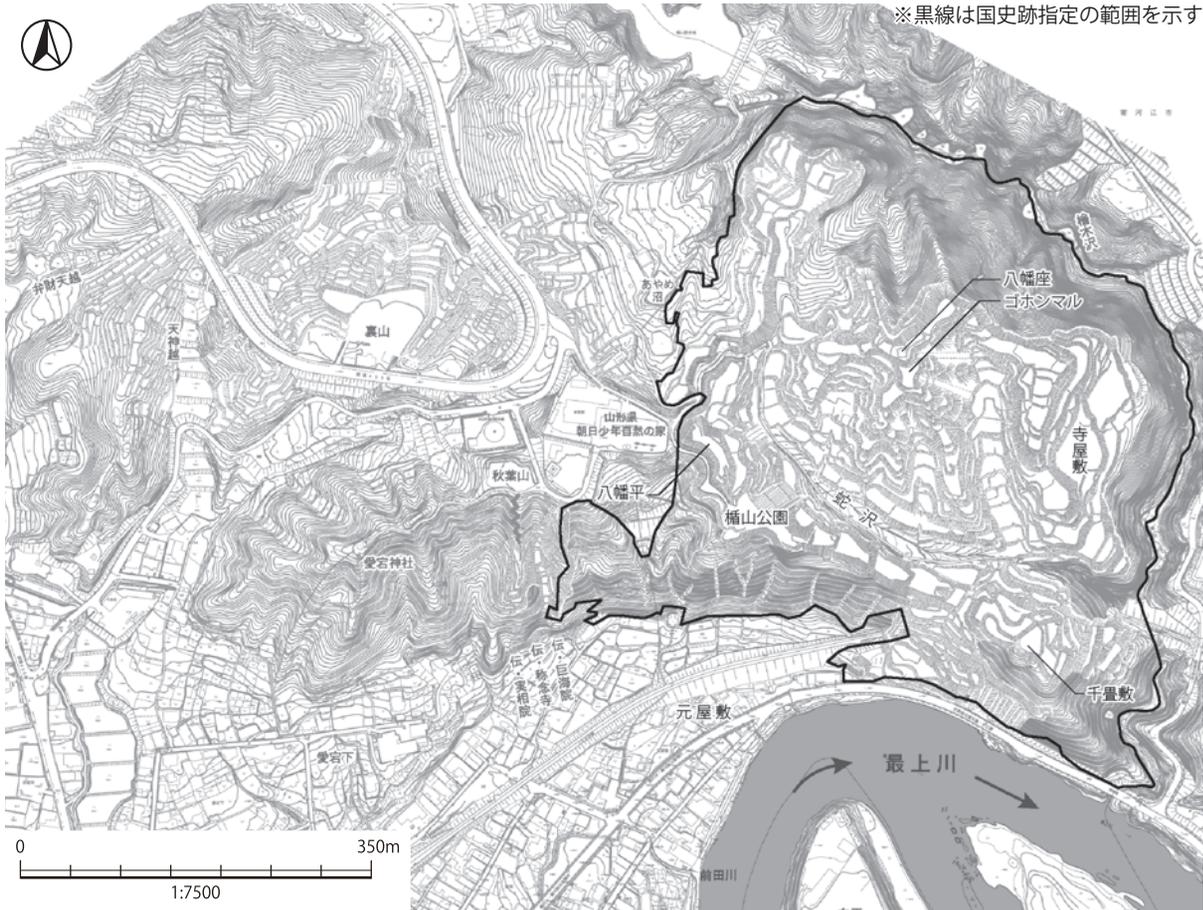
城跡南部の丘陵では、東西に延びる尾根上に曲輪が造られている。尾根は掘切で分断され、最上川に面した斜面を登るルートが、この掘切に至ることが指摘されている(伊藤ほか 2007)。掘切の東側には、掘立柱建物跡や地下室とみられる竪穴が確認された「千畳敷」と呼ばれる曲輪がある。西側には「八幡平」や楯山公園(日本一公園)が存在する。



第1図 左沢周辺の中世城館跡分布図(城館の位置・範囲は山形県遺跡地図、『左沢楯山城跡発掘調査報告書(9)』参照)



第2図 左沢周辺の近世の主な道と河川(菊地一郎氏所蔵 天保9年『左澤御領内御絵図』を基に作成、絵図による注記は金山耕三氏の報告(金山 1996)を参考にした)



第3図 左沢楯山城跡縄張図（『左沢楯山城跡発掘調査報告書（9）』より転載、史跡指定範囲と地名を加筆）



第4図 左沢楯山城跡航空写真（南東から、黒線は国史跡指定範囲を示す）

### 3 歴史的環境

大江町の西部から流れ、左沢で最上川に合流する月布川の河床では、草薙層（橋上層）がもたらした珪質頁岩を採取することができる。月布川沿いの段丘上では、縄文時代中期末葉の竪穴住居が検出された石器製作遺跡（橋上遺跡）が確認されている。旧石器時代から縄文時代にかけての月布川流域は、打製石器を供給する一大生産地であった（渋谷 2012）。

最上川左岸に位置する大江町藤田では、6基の窯跡が確認されており、窯跡や灰原から9世紀中葉頃の所産と考えられる資料が出土している（渋谷 2012）。左沢楯山城跡の「寺屋敷」で出土した9世紀後半の須恵器杯は、藤田窯跡の製品と推定されている（川崎 2007）。

左沢楯山城に関わる歴史は、第2表に示した通りである。

大江町を含む西村山郡一帯は、寒河江荘として摂関家領であったが、文治5年（1189）、奥州合戦に勝利した源頼朝により、寒河江荘の地頭として大江広元が補任された。寒河江荘は、建久3年（1192）、広元から長男の親広に相伝され、寒河江荘の地頭職は親広の子孫が知行した。

左沢楯山城跡は、遺物から15世紀後半から17世紀前葉の存続期間が確認されている。国史跡指定時には「左沢は村山地方から南の置賜地方へ抜ける交通の要衝であり、左沢氏とその一族、伊達氏、最上氏等との抗争を軸に展開した村山地方の中世から近世に至る動向を知るうえで貴重な城跡である」と説明された（平成21年2月12日 文部科学省告示第6号）。

大江氏は、南北朝期の14世紀後半に柴橋や白岩、左沢、溝延などに一族を配して、領内の防備と支配を図ったとされる。諸系図などから、このとき（正平年間頃）、寒河江大江氏七代時茂の三男元時によって、左沢楯山城が築城されたと考えられている。

ところが、天正2年（1574）には、天童や谷地などの城主と白岩・溝延・左沢の城主が、最上義守・伊達達輝に奉公して、義守と対立していた義光側の寒河江城を攻め落とした記録があり（『性山公治家記録』）、左沢、白岩など各地に配された諸族が自立し、分立した様子がうかがわれる。

天正12年（1584）には、最上義光が寒河江大江氏を攻略し、左沢も最上氏の支配下に置かれた。慶長5年（1600）の出羽合戦では、左沢楯山城も何らかの役割を果たしたとの指摘もある（北畠 2007）。

元和8年（1622）最上氏が改易され、左沢には、庄内藩主酒井忠勝の弟酒井直次を藩主とした、左沢藩1万2千石が成立した。直次は、左沢字小漆川（下小漆川）の台地に新しい城（小漆川城）を築いて、左沢楯山城は廃城となった。現在の字内町、字横町、字原町一帯では、小漆川城に伴う城下町の建設が行なわれるが、直次の死後、左沢藩は廃絶する。左沢は幕府領庄内藩預かり地、庄内藩領を経て、正保4年（1647）に松山藩領となった。松山藩の代官所が置かれ、幕末を迎えた。

また、近世左沢には最上川舟運の河岸があった。米沢藩御用商人の西村久左衛門が、元禄年間に最上川の五百川峡谷を開削し、米沢藩があった上流の置賜地方から河口の酒田まで最上川舟運がつながった。左沢には米沢藩の陣屋「米沢舟屋敷」が置かれ、左沢は、置賜地方と左沢より下流に位置する大石田河岸の間における最上川舟運の中継地として、重要な役割を担っていった。

近代以降の左沢では、明治30年代に最上川舟運は衰退するが、大正11年に鉄道が開通し左沢駅が開業する。

現在の大江町は、東から左沢、本郷、七軒に分けられる。これらは町村制の施行により、明治22年に成立した3つの村に対応する区分である。昭和29年に本郷村と七軒村が合併して漆川村、昭和34年に漆川村と左沢町が合併して大江町が成立した。

第2表 年表

西暦	年号	事 項	参 考 事 項
1184	元暦元	中原広元、公文所（のち政所）別当となる。	吾妻鏡
1189	文治5	中原広元、幕府体制確立と奥州平定の功により寒河江・長井の荘を賜るとされる。	安中坊系図
1190	建久元	多田仁綱、中原広元の目代として寒河江荘に入部、初め本館（寒河江市本橋）に住し、後吉川に移る。多田仁綱は広元の妻の父に当たるといふ。	安中坊系図
1191	建久2	親広、父広元の許可を得て鶴ヶ岡八幡宮の神霊を勧請し、寒河江八幡宮を建立すると伝える。	寒河江八幡由緒書
1192	建久3	親広、多田仁綱の後を受けて寒河江荘を領するとされる。	安中坊系図
1216	建保4	中原広元、勅裁を仰ぎ「大江」の姓に還る。	吾妻鏡
1219	建保7	武蔵守親広入道（寒河江）が京都守護に任命される。	吾妻鏡
1221	承久3	京都守護の前民部少輔親広入道（寒河江）、承久の乱で後鳥羽上皇方に加わり、親広は関寺の付近で没落し姿を消す。親広、寒河江荘に潜居するという。	吾妻鏡 安中坊系図
1225	嘉禄元	大江広元没、年78才。親広、父の死を悲しみ、阿弥陀の尊像を造り、吉川邑に安置するという。	吾妻鏡・安中坊系図
1232	貞永元	大江親広、鎌倉幕府より勘気を解かれるとされる。	大久保市右衛門系図 天文本系図
1241	仁治2	親広没、吉川阿弥陀堂の傍らに葬るといふ。	安中坊系図
1285	弘安8	執権貞時、御家人筆頭の安達泰盛を討つ（霜月騒動）。このとき大江氏の一族が多く討たれる。五代元顕の一族は寒河江荘に逃れ、月布川流域に住みつく。【元顕の弟、廣顕（顔好に、小沢と号す）・親元（十八才に、古河と号す）・公廣（材木に、西目と号す）元顕の二男、懷廣（柴橋に）】	天文本系図・吾妻鏡
1346~	正平年間	左沢元時、楯山城を築城し、寒河江八幡宮の分霊を八幡平に勧請すると伝える。	尊卑分派本大江系図他
1356	正平11	斯波兼頼（後の最上義光の祖）、羽州管領として山形に入る。以後南朝方の大江氏と北朝方の斯波氏との抗争続く。	最上氏系図 安中坊系図
1359	正平14	大江氏第六代元政（元顕の子）南朝方に味方し斯波軍と戦い戦死するとされる。	菅井本系図
1368	正平23	漆川の戦い。斯波直持・兼頼ら大江氏を攻める。溝延茂信、左沢元時、小泉時干、柴橋直干ら大江一族60余人戦死するという。	安中坊系図・天文本系図他 金仲山眼明阿弥陀尊略縁起
1373	文中2	大江時茂没、遺命して四男時氏に北朝に和を乞わせる。時氏、寒河江姓を称する。子元時を鎌倉に人質として送り本領を安堵される。	金仲山眼明阿弥陀尊略縁起
1391	元中8	寒河江大江氏八代時氏没と伝える。	和田市雄書留
1448	文安5	寒河江大江氏九代元時没と伝える。	和田市雄書留
1457	長祿元	寒河江大江氏十代元高没と伝える。	和田市雄書留
1479	文明11	伊達成宗、桑折播磨と寒河江城に迫る。寒河江知広、左沢撰津、溝延備前ら大江一族協力して迎撃するという。	松蔵寺幹縁疏
1480	文明12	伊達成宗の軍勢、桑折播磨を将として再び寒河江城を攻める。寒河江方の式部太夫、溝延備前、左沢撰津守厚久ら迎え撃つ。桑折播磨戦死するという。	松蔵寺幹縁疏
1486	文明8	寒河江大江氏十二代為広没と伝える。	
1494	明応3	寒河江大江氏十三代知広没と伝える。	澄江寺過去帳・天文本系図
	明応年間	大江宗広、漆川前萩の袋のうち岩脇在家を澄江院（寺）へ寄進する。	澄江寺文書
1504	永正元	最上義定、2度にわたって中野より山形へ入部。大江氏一族団結して義定に助力する。寒河江十四代大江宗広が死没するという。	安中坊系図・天文本系図
1514	永正11	伊達植宗が最上侵攻を始める。左沢城主九代左沢政周、最上義定の要請を受け長谷堂の戦に参戦し戦死。	伊達正統世次考 安中坊系図
1517	永正14	伊達植宗、天童・高擡を攻めた時、大江家家臣富沢太郎三郎ら7名捕虜となる。	伊達正統世次考
1521	大永元	伊達植宗、高擡山より八幡原に布陣、寒河江孝広一族を集めて対陣するという。	安中坊系図・天文本系図
1527	大永7	寒河江十五代孝広没と伝える。	陽春院由緒書
1546	天文15	寒河江十六代広種没と伝える。	天文本体系図
1560	永祿3	山形城主最上義守（最上義光の父）、寒河江城を攻める。大江兼広これを迎え撃つという。	安中坊系図
1565	永祿8	最上義光、東五百川新宿鳥屋ヶ森城岸美作守、八ツ沼城原美濃守の両者を攻めるという。	最上記・福昌寺過去帳他
1574	天正2	義守・義光親子の不和が内紛となる。寒河江城主は義光派、溝延・左沢などの城主は義守派となる。天童・谷地・蔵増・溝延・左沢の各城主が寒河江城主を攻める。	伊達治家記録
1582	天正10	最上義光は下国氏に書状を送り、白岩八郎四郎が大宝寺方に内密したので、それを鎮圧したこと、来る春中には清水・鮭延両氏と共に庄内に攻めこむので同時に攻撃するように要請している。	湊文書
1583	天正11	大江高基、最上義光の庄内武藤氏攻略の気配を察知し援軍を庄内に進める。	慈恩寺三千仏裏書
		反義光派の天童頼久、義光軍によって攻められ落城する。	永慶軍記
1584	天正12	寒河江城主十八代大江高基、最上義光に攻められ中野原に戦って敗走、貫見村松田彦次郎の楯に逃れたが、御館山山頂で自刃。寒河江領は最上義光の配下に入る。	大江各系図・義光物語 永慶軍記
1600	慶長5	石田方の会津120万石上杉景勝の将、米沢城の直江山城守兼統、関ヶ原の戦いに応じ最上勢を攻める。（畑谷城→長谷堂城）別將志駄義秀ら六十里を進み白岩・寒河江・谷地の諸城を陥れる。関ヶ原の戦いの結果により上杉勢退く。	小山田文書他
		左沢に長尾右衛門入封、石高2300石。	最上義光分限帳他
1614	慶長19	最上義光没、69歳。家親家督を継ぐ。	寛永諸家譜他
1622	元和8	最上家改易（斯波兼頼山形入部以来の最上家支配終わる。）酒井直次、左沢領主となる。	徳川実紀
1624	寛永元	小漆川城築城が始まると伝える。	出羽国風土略記
1631	寛永8	左沢藩主酒井直次死去。左沢藩廃絶。庄内藩の預地となる。	大泉紀年
1632	寛永9	丸岡領の替地として左沢領12,000石庄内藩領となる。左沢代官所をおく。	寛永重修諸家譜・大泉紀年
1647	正保4	左沢領12,000石松山藩領となる。	寛永重修諸家譜
1648	慶安元	左沢に松山藩の代官所が置かれる。（以後明治まで続く）	

（『左沢楯山城跡調査報告書（9）』より転載）

### Ⅲ 八幡座地区の確認調査

#### 1 調査の概要

##### (1) 調査の経緯

前述のとおり本調査は、史跡の保存整備を目的とした調査4カ年計画の初年度にあたる。八幡座地区においては、平成13年度にC1調査区として調査が行なわれた、「八幡座」と呼ばれる曲輪の確認調査を実施した。

「八幡座」は標高222mで城跡の頂上を占めるが、面積は約120㎡と小規模な曲輪である(第3図)。

平成13年度の調査では、16世紀の中国の染付碗や17世紀の波佐見の香炉などが出土している。地山を掘りこむ柱穴跡が検出され、数棟の小規模建物の重複が認められた(第6図)。建物跡は、規模や形式が確定しないものの、地名からは八幡神社本殿が想定されている(宮本2007)。また「現代の整地層」が3～15cmの厚さで、掘り下げた遺構確認面の深さは30cm前後。一部岩盤が見えている場所があると報告されている(日下部2007)。

前回の調査で表土が薄いことが確認されており、現時点においても、柱穴の掘りこみが確認される石が露出している。また、現在使用している、坂虎口状の地形に沿って設けられた通路と階段が崩れかけている。

これらの現状から、町では、遺構を養生しながら、山城跡であることが感じられる景観や散策のための通路等の整備を予定している。そのため、虎口の地形や関係する施設の有無、曲輪の構造を解明するために調査を実施した。

##### (2) 調査の方法と経過

調査にあたって、委託業務で既知点(B5、B4)から、B5A(X: -178808.347、Y: -53993.883、標高: 221.183)とB5B(X: -178798.020、Y: -54000.596、標高: 221.741)の4級基準点2点を設置した。

調査範囲は、山頂の平坦部で前回の調査範囲を含め面的に調査区を設定し、地形から坂虎口と想定される南東部分と、曲輪の地形の広がりを確認するため西側部分にトレンチを伸ばした。調査面積は80㎡である(第8図)。

発掘では、十字のトレンチを設けて遺構面の深さを確認した後、調査区中央部で土層観察用のベルトを東西方向に残して掘り下げ、地山である砂質凝灰岩(第10図、Ⅲ層)の上面で遺構の検出を行なった。

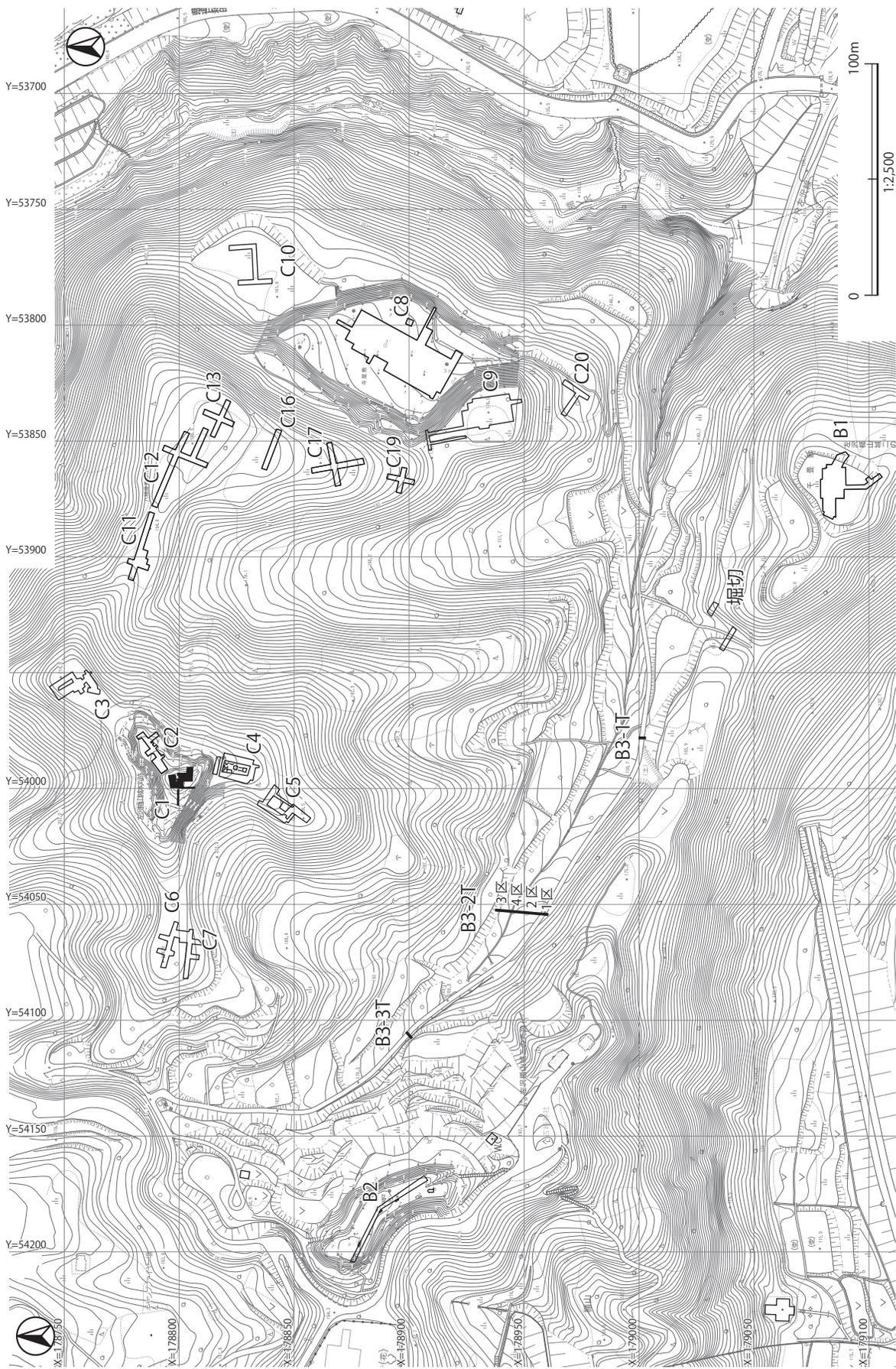
当初、前回の調査範囲内で完掘された遺構は検出に留め、新しく検出した遺構について、必要な場合に限り半截を行なう予定であった。しかし、前回の調査記録上の調査区や遺構の配置と実際の位置が異なり、遺構検出段階において完掘された遺構が判断が困難な場合があった。また、完掘された遺構内部が空洞で、再度検出した状態を留められない遺構があった。そのため、前回の調査範囲と想定していた場所の遺構も含め、半截や前回埋め戻した土の除去を行なった。

遺構の配置や土層について、平板測量や実測を行なったほか、委託業務で調査区全体のオルソ写真を作成し、座標データを付した遺構図を作成した。

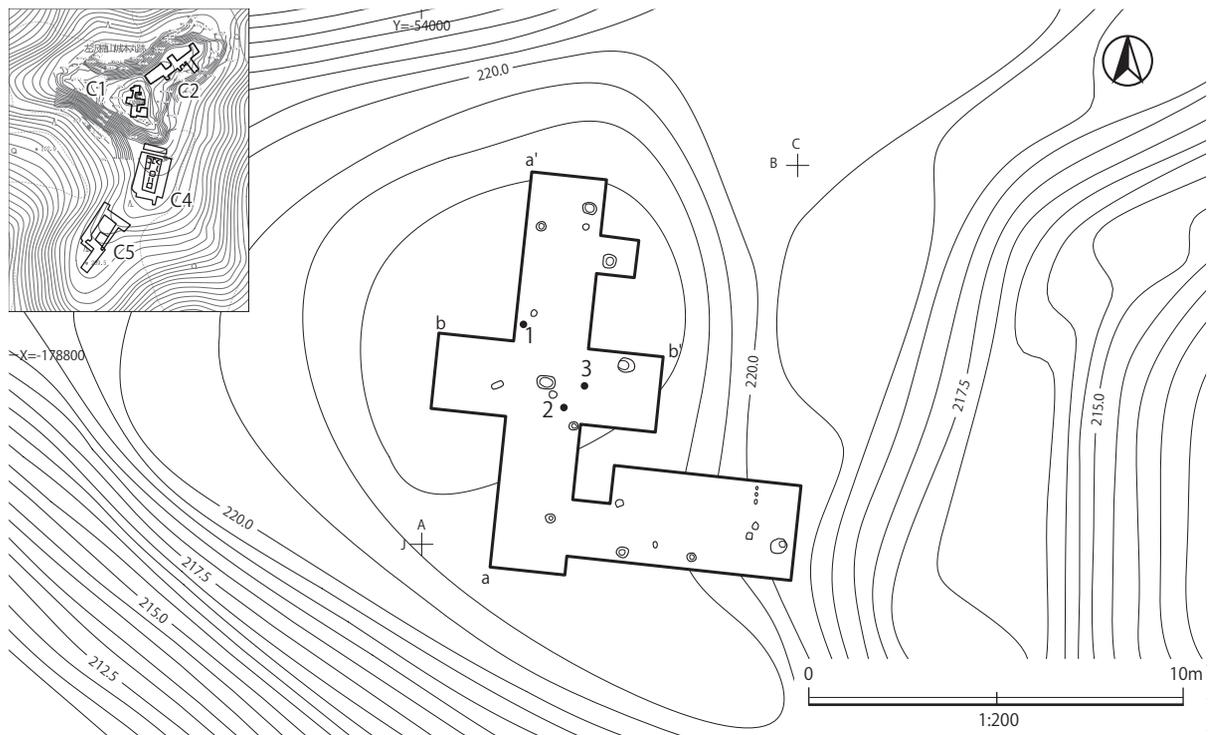
8月21日には現地説明会を開催(蛇沢地区含む)、32人にご参加いただき、8月23日には平成23年度第2回史跡左沢楯山城跡保存整備検討委員会を開催して、委員の方々から現地でご指導をいただいた。

測量や写真撮影終了後、遺構部分を山砂で埋めた。調査区全体については、翌年度継続した調査を予定するため、農業用の保温シートとブルーシートで養生して調査を終了した。

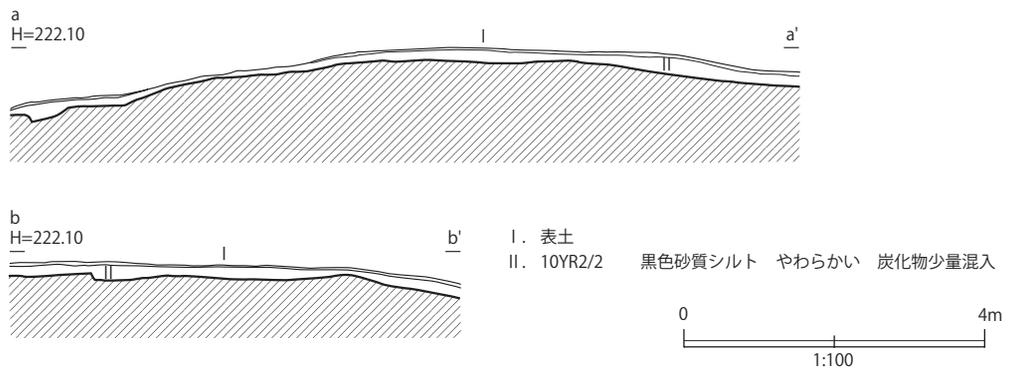
調査は平成22年8月2日から8月31日にかけて、実働21日間実施した。調査の経過は9頁のとおりである。



第5図 左沢榑山城跡調査区位置図 (1 / 2500)



C1 調査区平面図（『左沢楯山城跡』第5図C1調査区平面図を転載）



C1 調査区土層断面図（『左沢楯山城跡調査報告書（9）』第13図C1基本層序を転載）

第6図 平成13年度C1調査区平面図・土層断面図



平成13年度調査C1調査区



平成13年度調査C1柱穴跡

第7図 平成13年度の調査

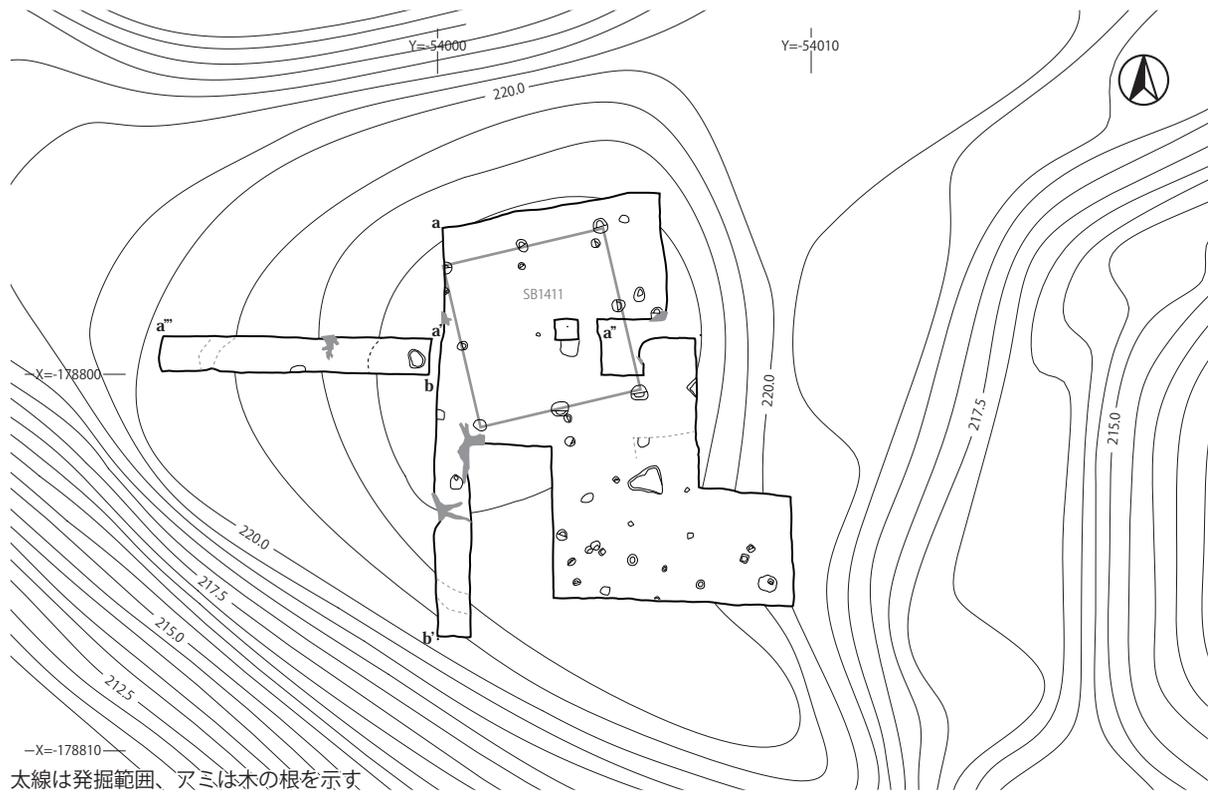
第3表 遺構番号対応表

平成23年度		2007 報告書	2002 報告書	平成23年度		2007 報告書	2002 報告書
報告書	発掘現場			報告書	発掘現場		
765	765	765	P 2	1436	1436	番号なし	P13
766	1428	766	P 3	1437	1437	番号なし	番号なし
767	767	767	P 4	1438	1438		
768	1448	768	P 5	1439	1439		
769	769	769	P 6	1440	1440		
770	770	770	P 8	1441	1441		
773	773	773	P10	1442	1442		
774	774	774	P11	1443	1443		
775	775	775	P12	1444	1444		
777	777	777	P14	1445	1445		
778	778	778	P15	1446	1446		
1422	P4	番号なし	P 1	1447	1447		
1423	1423			1449	1449		
1424	1424			1450	1450	番号なし	番号なし
1425	1425			1451	1451		
1426	1426			1452	1452		
1427	1427			1453	1453		
1429	1429			1454	P13		
1430	1430			1455	P16	番号なし	P16
1431	1431			1456	P17	番号なし	P17
1432	1432			1457	P18	番号なし	P18
1434	1434	番号なし	番号なし	1458	P 7	番号なし	P 7
1435	1435	番号なし	番号なし				

「2002 報告書」は『左沢楯山城遺跡調査報告書(4)』、「2007 報告書」は『左沢楯山城跡調査報告書(9)』で遺構に付された番号、「平成23年度の報告書」の欄は本書で遺構に付した番号を示す。「2002 報告書」と「2007 報告書」で番号に重複がみられたため、「2007 報告書」の番号を基本として、「2007 報告書」で番号が付されていない遺構は、今回番号を付した。また、発掘調査現場の終了後、図面等の確認により一部番号を修正したため、発掘当時の写真等と整合性を図るため、現場で使用した番号を「平成23年度の発掘現場」の欄に記載した。

#### 調査の経過

8月9日	機材の搬入
8月10日～12日	調査区の設定、調査区のうち十字型に遺構面まで掘り下げ
8月16日～24日	調査区全体で遺構の検出、精査
8月21日	現地説明会
8月23日	平成23年度第2回史跡左沢楯山城跡保存整備検討委員会開催、委員による現地指導
8月25日～29日	オルソ写真と遺構図のための座標測量(委託業務)
8月29日～31日	埋め戻し、遺構の養生



太線は発掘範囲、又ミは木の根を示す

第8図 C1調査区平面図(1/200)



調査風景



現地説明会



C1調査区の養生



左沢楯山城跡の利用(史跡内見学、ワークショップ時)

第9図 平成23年度C1調査区調査風景など



C1 調査区土層注記

- I a 10YR3/2 黒褐色土 (表土)
- II a 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土 (均一)
- II b 10YR5/3 にぶい黄褐色土
- II c 2.5Y5/6 黄褐色砂質土 (地山小ブロック含む)
- II d 2.5Y7/6 明黄褐色土 (地山ブロック含む)
- III 2.5YR6/4 にぶい黄色 (地山、岩盤)

第10図 C1 調査区土層断面図 (1 / 60)

## 2 調査の成果

### (1) 概要

本調査区では、地表から約5～10 cmが表土（第10図、I層）で、遺構は地山（同図Ⅲ層）である岩盤を掘りこむように検出された。岩盤は、平坦な部分では地表から約20 cm下で確認されたが、調査区の北・東側は10 cm未満で露出していた部分もある。

遺構は、建物跡や柱穴跡などが検出された。なお、平成13年度に行なわれた調査にかかる報告書は3冊刊行されているが、使用されている遺構の番号が異なるため、本書では、2007年に刊行された報告書の番号を利用して遺構に付する番号の整理を行なった（第3表）。

### (2) 遺構

建物跡1棟（SB1411）と、柱穴跡または柱穴跡とみられるピットなどを検出した（第11図、第12図）。

建物跡は、南部より一段高くなっている調査区北部で検出した。曲輪全面を発掘していないため、建物については、現在想定できる範囲で記述する。

平坦面の広がりや柱穴の位置から、建物の規模は2間×2間で柱間は約2.2 m、桁行と梁行は共に4.4 mとみられる。周辺の状況から南が正面で桁行は東西方向であることが想定され、方位は桁方向でN76°Eである。

建物跡を構成する柱穴（767、769、770、1422、1423、1424、1425、1426）のうち、今回新たに検出した柱穴跡（1423、1425）では、柱のあたりとみられる黒褐色土が確認されたが（第11図）、調査区外に広がる柱穴跡（1424）もあり、今後検討が必要である。柱穴跡の掘りこみの直径は30 cmから45 cm程度である。

また、覆土の切り合いが確認できた遺構はないが、柱穴の分布から、建物や施設は2時期以上に分けられると想定できる。

建物跡（SB1411）以外にも、調査区全体で柱穴跡とみられる掘りこみが確認できた。形状は丸と四角で、石を四角く掘りこんだ遺構（1457、1441）もみられた。四角い形状の柱穴は調査区南部に、丸い形状の柱穴跡は調査区の平坦な面全域に分布する。

調査区の南部では、直径が20 cm～30 cm程度の丸い柱穴跡が、おおよそ東西に並んで検出された（774、777、778、1436、1450）。西から深さ約52 cm（774）、15 cm（1450）、66 cm（1436）、18 cm（777）、58 cm（778）と、深さ50 cm以上の柱穴と深さ20 cm未満の柱穴が交互に並ぶ。

併せて四角い形状の柱穴跡も検出された（775、1435、1443、1446、1447、1455、1456）。前述した石を掘りこんだ遺構（1441、1457）も、調査区南部で検出されている。あたりとみられる黒褐色土が確認された遺構もある（1440、第12図）。

調査区北部では建物跡一棟が検出されたほか、調査区の端（1424、1449、1453）や建物内部に位置する場所（765、766、1427）などで、柱穴跡とみられる掘りこみが確認できた。建物跡（1411）を構成する可能性も視野に入れて、今後の検討を進める必要がある。

その他、地山の岩盤を浅く（10 cm未満）掘りこんだ跡もみられた（1432、1434など）。

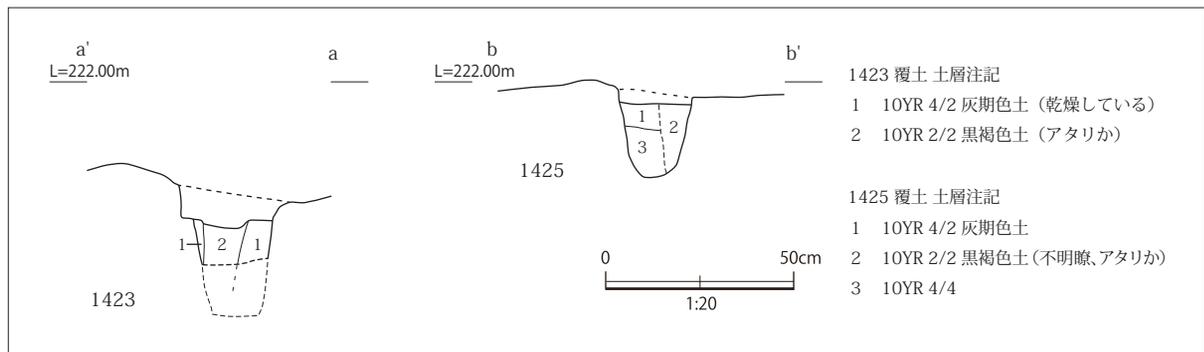
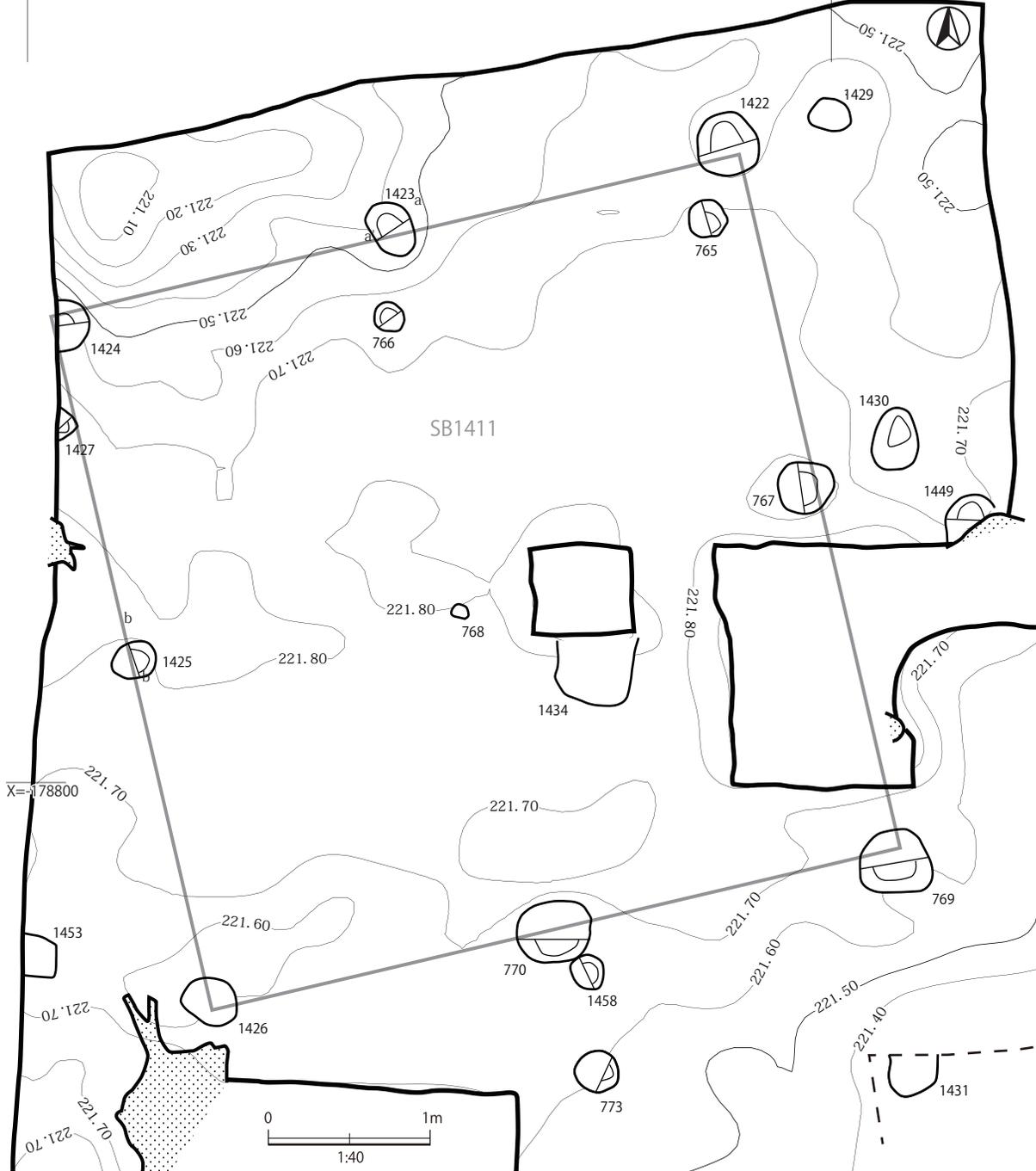
なお、地山の岩盤には、南西から北東の向きに幾条か溝状の亀裂が入っているが、人為的な遺構ではなく節理面であるとみられる。

今回の調査は、虎口と関連施設の確認を目的の一つとする。坂虎口状の地形は、曲輪の南東部において、北東から南西に登る形で確認できる。該当部分の調査範囲では、地山の地形が同じ方向に傾斜することが確認できた。ただし、虎口とみられる斜面の下部は調査区に含まれていない。虎口状の地形の上部に位置する石を掘りこんだ遺構（1457）や四角い柱穴跡（1455、1456）、東西に並ぶ柱穴跡（775、1435ほか）については、これらの南側に広がる、調査区外の平坦面を確認してから性格を検討する必要がある。

建物跡やその他の柱穴跡についても、年代と性格の検討が課題であり、次年度予定する調査区の拡張を経て、検討を進める必要がある。

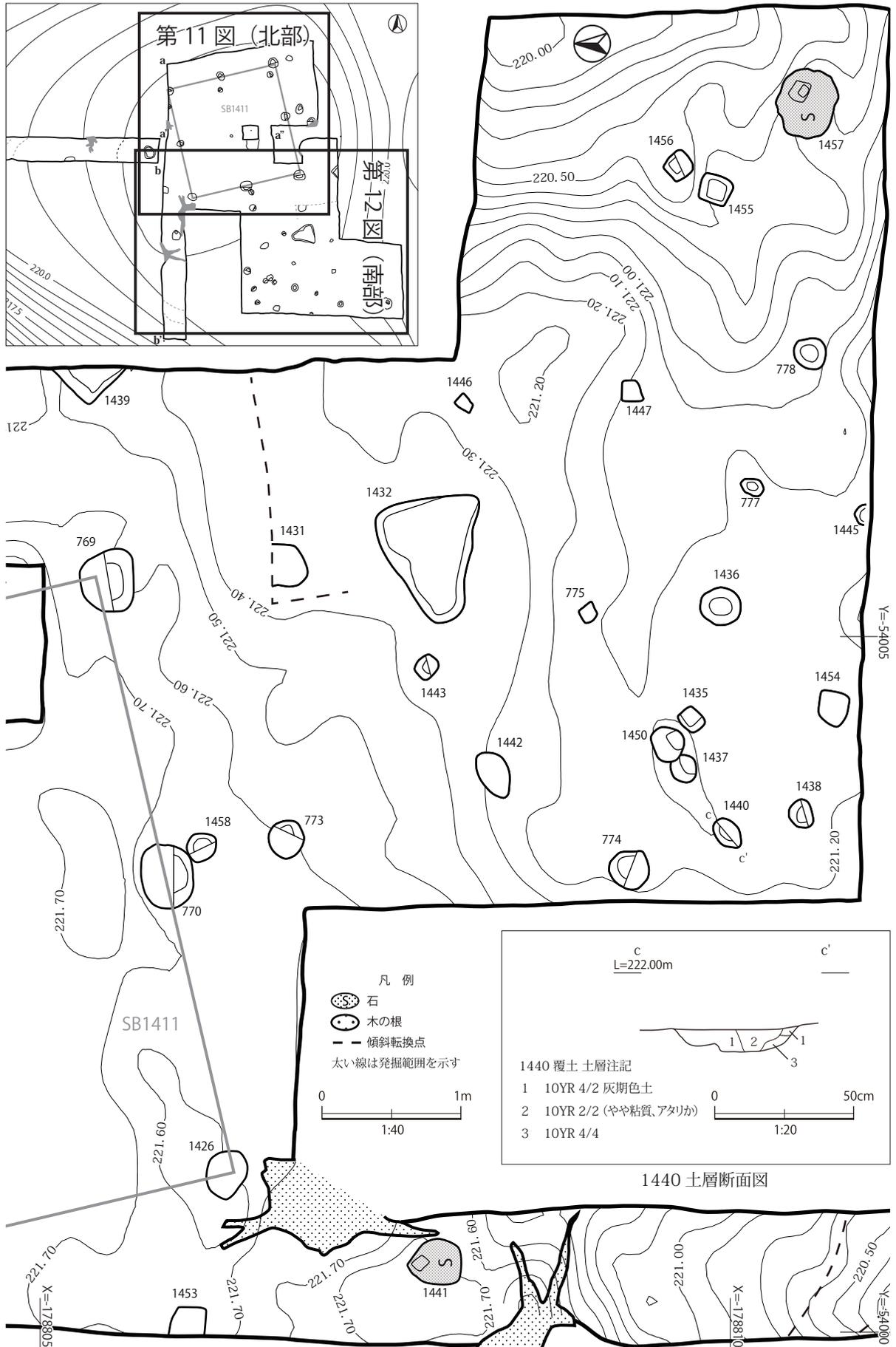
Y=54000

Y=54005



1423、1425 土層断面図

第 11 図 C 1 調査区北部遺構平面図 (1 / 100) ・遺構断面図 (1 / 20)



第12図 C1調査区南部遺構平面図 (1/100)・遺構断面図 (1/20)

### (3) 遺物

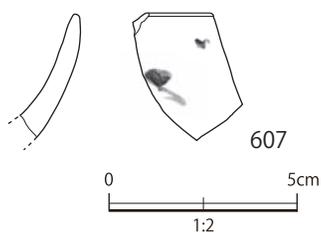
これまでの出土遺物から、城域の利用は① 12～13世紀、② 15世紀後半～17世紀、③ 18世紀以降に大別される。②は史料による築城期（14世紀後半）の遺物がなく、また廃城時期よりやや新しい遺物が含まれるものの、城が機能した時代の遺物とみられている（上田 2008）。

平成 13 年度の調査で、②に該当する遺物は、16 世紀の中国産染付碗、17 世紀以降の波佐見の青磁香炉、17 世紀の唐津の播鉢が出土している。遺構からの出土は報告されていない。

今回の調査では③に該当する波佐見の染付碗口縁部 1 点が、調査区中央部のⅡ層から出土した（第 10 図、図版 9 607）。

近世代を中心とした波佐見焼について中野雄二氏が編年を提示しており（中野 2000）、それを参考にすると、出土した染付碗の破片は 19 世紀前半の丸形碗とみられる。

遺構から出土した遺物は確認できなかった。



第 13 図 C1 出土 遺物実測図（1 / 2）

## IV 蛇沢地区の試掘調査

### 1 調査の概要

本調査区は、城に取りこまれた自然の沢（蛇沢）沿いに伸びる谷の部分で、沢と並行する砂利敷きの私道が通っていた場所である。今後、私道部分を史跡の管理や活用に利用するべく、城に伴う道の有無や地下の状況を確認するための調査を行なった。

調査区では、東から順に1トレンチ（1T）、2トレンチ（2T）、3トレンチ（3T）と名称を付した。

また、これまでの調査区は、『左沢楯山城跡調査報告書（9）』によるA～D地区区分で、該当する各地区のアルファベットを冠した数字で表されている。今回の調査も同様に、前掲のA～D地区区分で、蛇沢の調査箇所が該当する「B地区」のアルファベットを冠して「B3調査区」と表す。

調査にあたり、委託業務で10点の4級基準点（第4表）を設置した。

調査区では、それぞれ蛇沢と直交する方向に、幅2m程度のトレンチを3箇所設定した。東から長さ約5mの1T、約6m（1区）と15m（2・3・4区）の2T、約5mの3Tである（第4図）。発掘面積は1T～3T合計で62㎡である。

1Tと3Tは、蛇沢南側の斜面から道路部分に設定した。

2Tでは、南から順に、城跡南部の丘陵の斜面から斜面下の道路部分に1区、蛇沢に沿ってのびる谷の中央部分に2区、城跡北部の丘陵下部から斜面部分にかけて3区を設定。1区と2区で溝状の地形（SD1402）が検出されて調査中に拡張した部分を4区とした。溝（SD1402）の覆土（黒色粘質土）については、委託業務で放射性炭素年代測定を実施した。

調査では、表土の除去と埋め戻しに重機を使用した。遺構の配置や土層の実測を行なったほか、委託業務でオルソ写真を作成し、座標データを付した遺構図と土層断面図を作成した。

なお、本地点でも八幡座地区同様に現地説明会を開催し、史跡左沢楯山城跡保存整備検討委員会から現地でご指導をいただいた。

測量や写真撮影終了後、トレンチ内に山砂を敷いて、その上に掘削した土を埋め戻して調査を終了した。

調査は平成22年8月2日から8月30日にかけて、実働10日間実施した。調査の経過は18頁のとおりである。

第4表 蛇沢地区設置4級基準点座標

	X	Y	標高
ST 1	-178853.118	-54141.113	181.391
ST 2	-178884.843	-54118.267	175.946
ST 3	-178931.536	-54079.605	168.748
ST 4	-178958.141	-54050.309	166.241
ST 5	-178997.976	-53987.928	159.625
ST 6	-179001.689	-53938.833	154.747
ST 7	-179003.749	-53890.941	149.090
ST 8	-178981.987	-53830.251	160.670
ST 9	-178971.287	-53818.626	161.345
ST 10	-178950.674	-53813.923	164.459

座標は世界測地系平面直角座標第X系による。また、2011年3月11日の東北太平洋沖地震以前の与点成果をもとに基準点の座標を計算したものである。

## 調査の経過

8月1日	機材の搬入
8月2日	重機による表土の除去
8月3日～12日	調査区全体で遺構の検出、精査、実測・測量、オルソ用写真撮影
8月21日	現地説明会
8月23日	平成23年度第2回史跡左沢楯山城跡保存整備検討委員会開催、委員による現地指導
8月30日～31日	2T拡張（4区）部分の重機による表土の除去及び精査、実測
8月29日～31日	埋め戻し

## 2 調査の成果

### (1) 遺構

1 Tは、蛇沢南側に位置する尾根の斜面から、沢に沿って伸びた平坦地の私道部分に設定した。

表土直下で農道の整地層（第16図、Ⅱ層）が確認されたほか、地表から約20～30cm下で南側の斜面下に幅約1間の平坦面と、それと並行する溝状の掘りこみ（SD1401）と掘りこみ内の柱穴跡を検出した。溝状の掘りこみ（SD1401）は布堀りとみられる。布堀りの中とその北には、直径15cm程の円形の土色変化が13カ所みられ、土止め用の杭跡の可能性ある。溝の幅は約1mで、覆土は北が低くなるように堆積しており、掘りこみの北側は、南側に比べて約60cm低い。地山の地形は南から北に向かって低くなるように傾斜している。

蛇沢南側の尾根には曲輪が造成されている。1Tに一番近い曲輪の西側から、東西の向きで西に下る道のような地形がみられる。この道のような地形を西に延長したあたりに、1Tで検出された平坦面が位置する。平坦面は曲輪からつながる通路の可能性があり、今後性格を検討する必要がある。

2Tでは、蛇沢と直交する直線上に、南から順番に1区、2区、4区、3区を設定した。2・4・3区がつながっており、現在の沢部分を含め蛇沢を横断する。

2Tでは、1区の北部から2区の南部にかけて、地表から約70cm～100cm下部で溝状の地形（第15図、SD1402）を確認した。溝状の地形は幅約9mで、蛇沢と同じ方向に延びる。また、溝状の地形（SD1402）と同じ向きの別の溝によって切られている。

溝状の地形（SD1402）の覆土には黒色粘質土（SD1402-F2）がみられ、河川に堆積した植物遺体などの炭化物が含まれる可能性があると考えた。そのため、黒色粘質土（F2）と溝状の地形（SD1402）を切る溝の覆土（F5）について、山形大学高感度加速器質量分析センターに依頼し、放射性炭素年代測定を実施した。年代測定の資料は、溝状の地形の覆土（F2）では地表から120cmと150cmの地点2箇所採取した。

2T3区は蛇沢北側の丘陵斜面にかけて設定している。3区の北側にも幅1m程の布堀り状の掘りこみ（SD1403、SD1404）が検出された。

また、溝状の地形（SD1402）が古い蛇沢であるのか、あるいは現在の蛇沢下部にも古い沢があるのかを確認するために、現在、沢が位置する2T2区と3区の間をつなげるように調査区を拡張して、2T4区とした。4区では沢による堆積と、沢の跡（SD1405）が確認された。この沢が古い蛇沢であるとみられる。4区は沢状のくぼみ部分で地表から約125cm掘り下げた。

なお、2T2区では、17世紀の碗と皿が1点ずつ出土した。

3Tは「楯山公園」の北側下部にあたる。丘陵斜面近くに幅100mの平坦面があり、さらに南側斜面から北に向かって傾斜する地形が確認された。傾斜面北側には直径30cm程の掘り込みが3カ所検出されている。

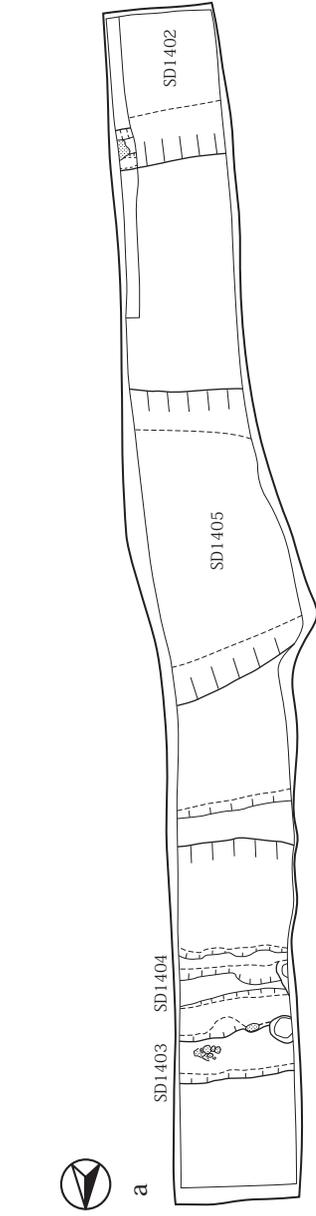
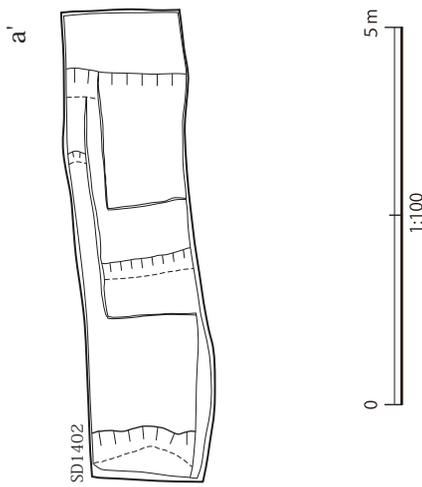
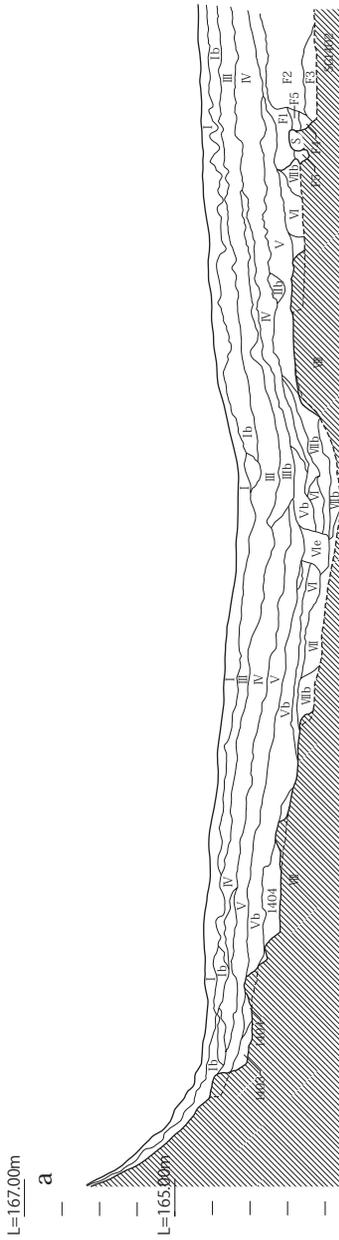
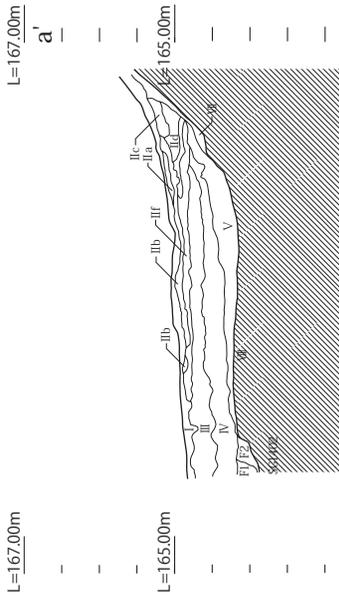


表土の除去



現地説明会

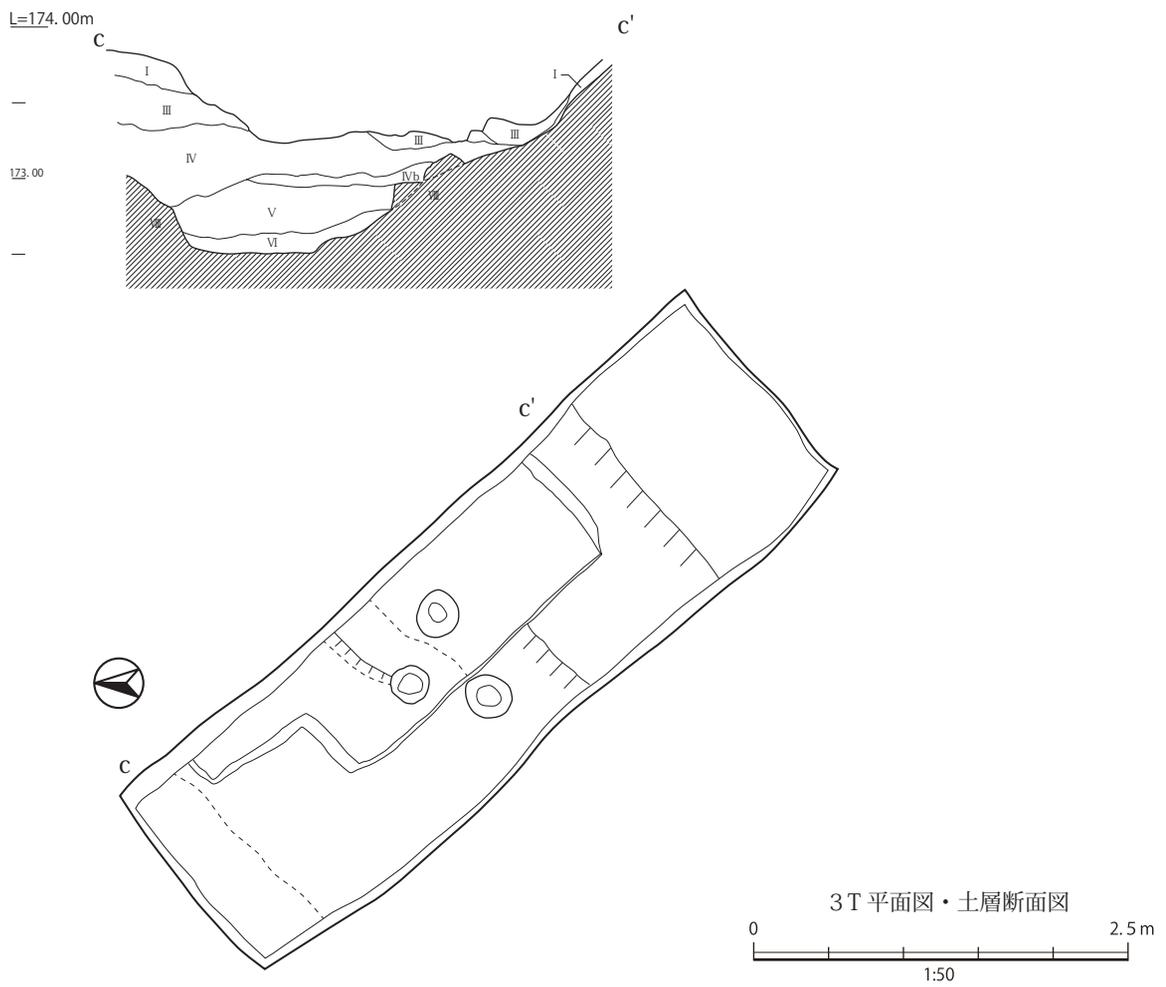
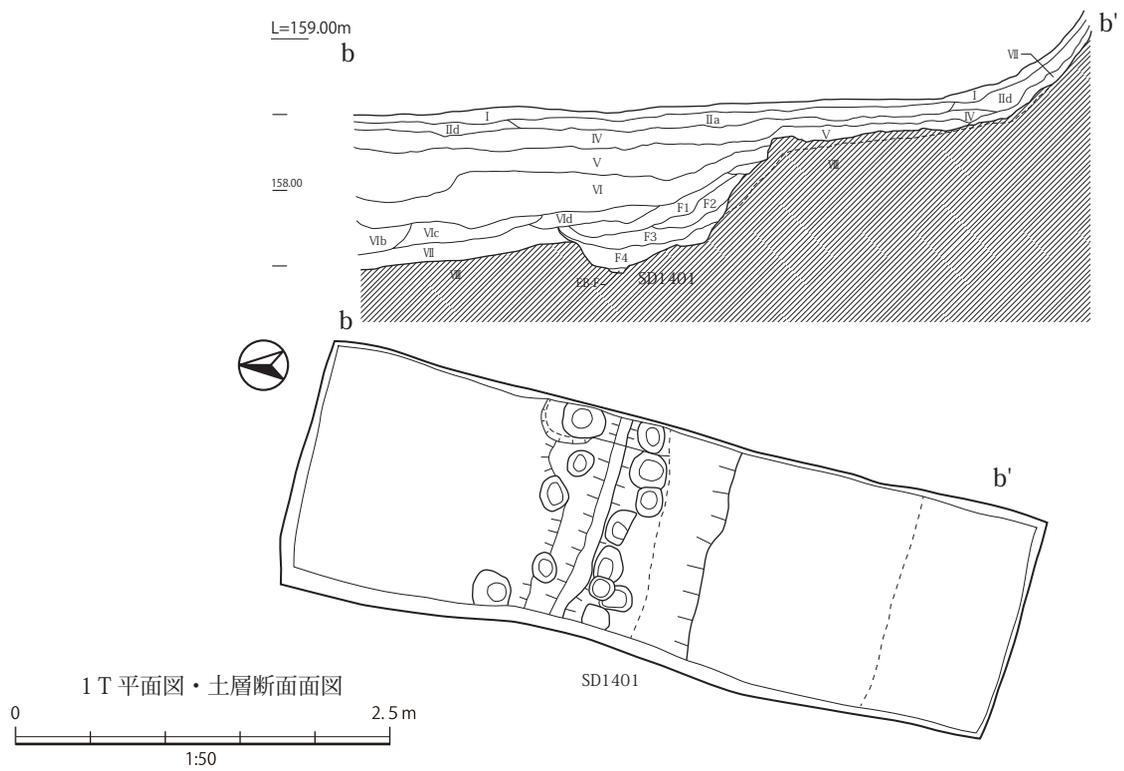
第14図 平成23年度B3調査区調査風景



B3 調査区土層注記

- |            |       |     |                    |  |  |  |  |
|------------|-------|-----|--------------------|--|--|--|--|
| I          | 10YR  | 2/2 | 黒褐色 (表土)           |  |  |  |  |
| I-b        | 10YR  | 3/3 | 暗褐色粘質土             |  |  |  |  |
| II-a       | 7.5YR | 4/4 | 砂礫層 (農道舗装面)        |  |  |  |  |
| II-b       | 10YR  | 4/4 | 褐色砂質粘土 (農道路盤)      |  |  |  |  |
| II-c       | 10YR  | 2/2 | 黒褐色砂質粘土 (農道路盤)     |  |  |  |  |
| II-d       | 10YR  | 4/3 | 黒褐色砂質土 (農道路盤)      |  |  |  |  |
| II-e       | 10YR  | 2/2 | 黒褐色砂質土 (農道路盤)      |  |  |  |  |
| II-f       | 10YR  | 3/3 | 黒褐色砂質粘土 (粘土ブロック含む) |  |  |  |  |
| III        | 10YR  | 4/4 | にぶい黄褐色砂質土          |  |  |  |  |
| III-b      | 2.5YR | 3/3 | 暗オリーブ褐色砂質土         |  |  |  |  |
| IV         | 10YR  | 3/4 | にぶい黄褐色砂質シルト        |  |  |  |  |
| IV-b       | 2.5Y  | 4/4 | オリーブ褐色シルト          |  |  |  |  |
| V          | 10YR  | 4/4 | 褐色砂質土              |  |  |  |  |
| V-b        | 2.5Y  | 4/2 | 暗灰褐色砂質土            |  |  |  |  |
| V-c        | 2.5Y  | 3/2 | 黒褐色粘質土             |  |  |  |  |
| VI         | 2.5Y  | 4/2 | オリーブ褐色砂質粘土         |  |  |  |  |
| VI-a       | 2.5Y  | 4/6 | オリーブ褐色             |  |  |  |  |
| VI-b       | 10YR  | 3/3 | 暗褐色                |  |  |  |  |
| VI-c       | 10YR  | 4/6 | 黄褐色                |  |  |  |  |
| VI-d       | 10YR  | 5/6 | 褐色                 |  |  |  |  |
| VI-e       | 2.5Y  | 4/3 | オリーブ褐色細砂           |  |  |  |  |
| VII        | 10YR  | 5/4 | にぶい黄褐色粘質土          |  |  |  |  |
| VIII-b     | 2.5Y  | 3/3 | 暗オリーブ褐色粘質土         |  |  |  |  |
| VIII       | 2.5YR | 6/4 | にぶい黄色 (地山)         |  |  |  |  |
| SG1402-F-1 | 2.5Y  | 4/4 | オリーブ褐色粘土           |  |  |  |  |
| SG1402-F-2 | 10YR  | 2/1 | 黒色粘質土              |  |  |  |  |
| SG1402-F-3 | 10YR  | 3/4 | 暗褐色砂質粘土            |  |  |  |  |
| SG1402-F-4 | 10YR  | 2/2 | 黒褐色砂質粘土            |  |  |  |  |
| SG1402-F-5 | 10YR  | 2/3 | 暗褐色砂質粘土            |  |  |  |  |
| SG1403-F   | 10YR  | 4/4 | 褐色粘質土 (粘土ブロック含む)   |  |  |  |  |
| SG1404-F   | 10YR  | 3/3 | 暗褐色砂質土             |  |  |  |  |

第15図 B3 調査区2T 平面図・土層断面図 (1/100)



第16図 B3調査区1T・3T平面図・土層断面図

## (2) 遺物

1Tでは布堀跡とみられる溝状の掘りこみ(SD1401)内に位置する柱穴の覆土(F2)から、中央がくぼんだ石製品(図版5601)が出土した。

2T 1区では、頁岩の石器(図版5602)が出土した。剥片が流れ込んだとみられる。

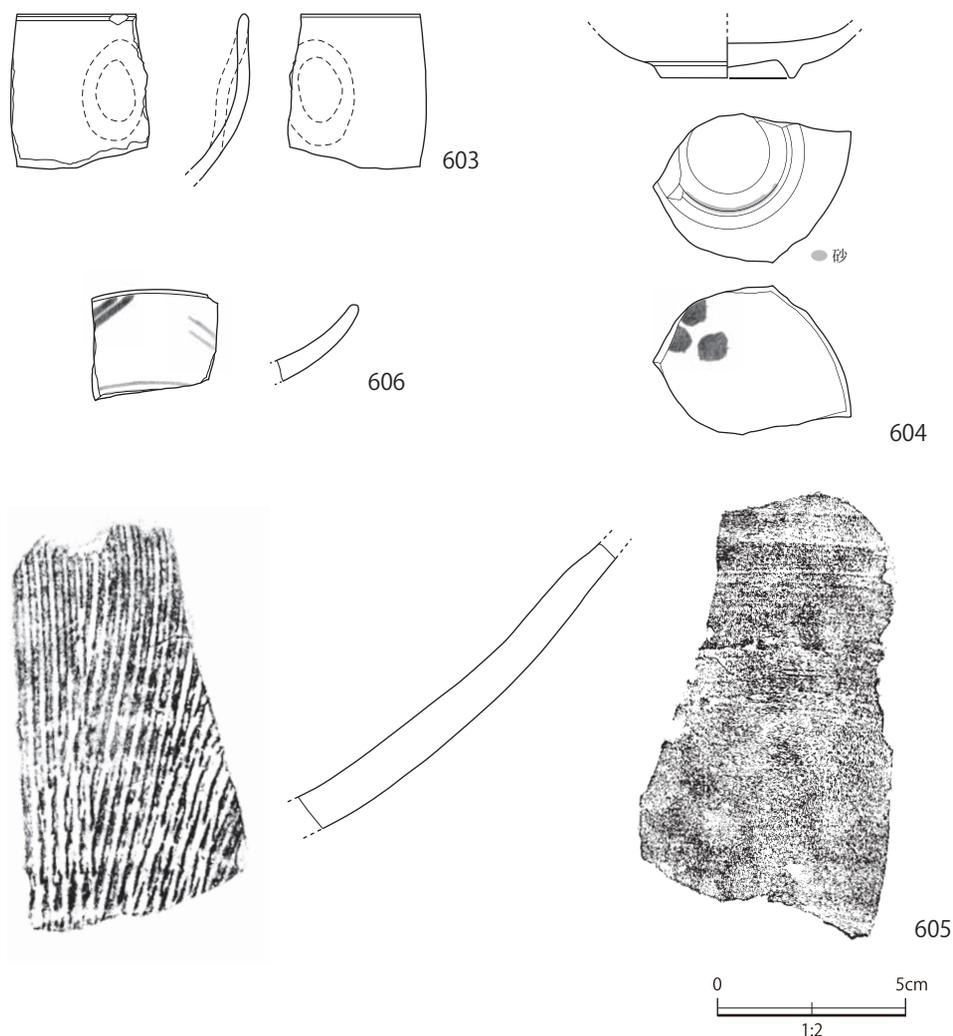
2T 2区では、17世紀前半の遺物が2点出土した。

16頁で記述したとおり、城域が利用された時期は①12～13世紀、②15世紀後半～17世紀、③18世紀以降の3つに大別して考えられている。2区で出土した遺物は、当該地が城として機能したとみられる②15世紀後半～17世紀に該当する。

2T 2区のⅢb層から出土した遺物(第17図、図版9603)は、17世紀前半頃の御深井釉の碗とみられる。御深井製品は、17世紀前半から中頃に美濃窯で生産されている(財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター編2003)。Ⅳ層から出土した遺物(第17図、図版9604)は、肥前磁器の皿の底部である。野上建紀氏の分類(野上2002)を参考にすると、17世紀前半の所産とみられる。

3Tでは③に区分される18世紀の遺物が2点出土した。

Ⅱ層から出土した遺物(第17図、図版9605)は唐津の播鉢で、全面に鉄釉がかけられている。家田淳一氏の分類(家田2002)を参考にすると、18世紀前半の所産で、高台が付くとみられる。Ⅳ層から出土した遺物(第17図、図版9606)は波佐見の磁器で、18世紀前半の皿である。



第17図 B3調査区出土遺物実測図

# 史跡左沢楯山城跡外郭トレンチ試料3点の年代測定結果

山形大学高感度加速器質量分析センター

門叶 冬樹、加藤 和浩、庵下 稔、和泉 彰紘、設楽 理恵、宇野 久

2011年10月10日

## 1. はじめに

大江町教育委員会から依頼のあった史跡左沢楯山城外郭トレンチ試料3点に対して、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

## 2. 試料と方法

大江町教育委員会から依頼のあった史跡左沢楯山城外郭トレンチ試料3点の試料情報を表1に、また試料の採取状況を図1に示す。それぞれのサンプルは、2011年9月16日に大江町教育委員会から受け取った。測定した各サンプルのラボコードは、YU-289からYU-291である。YU-289の炭化木試料は、山形大学総合研究所にて土壌サンプル中から取り出した。各サンプルから取り出した測定試料は、山形大学総合研究所4階の試料作製室において、表1に示す前処理作業を行った。続いて、元素分析計、質量分析計、ガラス真空ラインより構成されるグラファイト調整システムにて、サンプルのグラファイト化を行った。その後、総合研究所1階に設置した加速器質量分析計(YU-AMS: NEC製1.5SDH)を用いて放射性炭素年代を測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

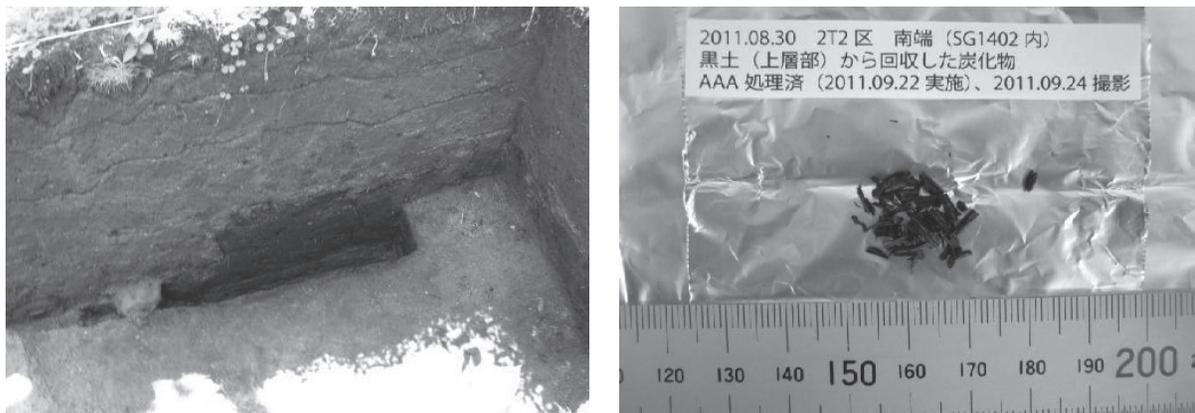


図1. 左沢楯山城外郭トレンチ (左) と取り出した炭化物試料 YU-289 (右)

表 1. 史跡左沢楯山城外郭トレンチ試料 3 点の試料情報

ラボコード	試料データ	試料状態	処理
YU-289	2T2 区 南端 (SG1402 内) 黒土 (上層部)	炭化木	超音波洗浄: 純水とアセトン :AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 1M NaOH 80 度 1 時間 (4 回) 1M HCl 80 度 1 時間
YU-290	2T2 区 南端 (SG1402 内) 黒土 (下層部)	土壌 (黒土)	酸処理 1M HCl 80 度 1 時間 (2 回)
YU-291	2T2 区 南部 (SG1402 北) 溝の覆土 茶黒混じり	土壌 (覆土)	酸処理 1M HCl 80 度 1 時間 (2 回)

### 3. 結果

表 2 に、史跡左沢楯山城外郭トレンチ試料 3 点の放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果を示す。各結果には、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した  $^{14}\text{C}$  年代、 $^{14}\text{C}$  年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。サンプル 3 点の暦年較正結果については、本報告書に添付した。

表 2. 史跡左沢楯山城外郭トレンチ試料 3 点の放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	試料名	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
YU-289	tnkbnk_atrz	-27.62 $\pm$ 0.22	5625 $\pm$ 27	5625 $\pm$ 25	4496BC (49.2%) 4446BC 4420BC (15.3%) 4399BC 4381BC ( 3.7%) 4375BC	4521BC (95.4%) 4367BC
YU-290	krtc_atrz	-25.03 $\pm$ 0.17	6938 $\pm$ 28	6940 $\pm$ 30	5845BC (68.2%) 5758BC	5886BC (95.4%) 5741BC
YU-291	fkdn_atrz	-22.25 $\pm$ 0.16	2387 $\pm$ 21	2385 $\pm$ 20	505BC (34.8%) 461BC 451BC ( 8.7%) 440BC 418BC (24.7%) 400BC	522BC (95.4%) 396BC

==== 年代測定の考え方 ====

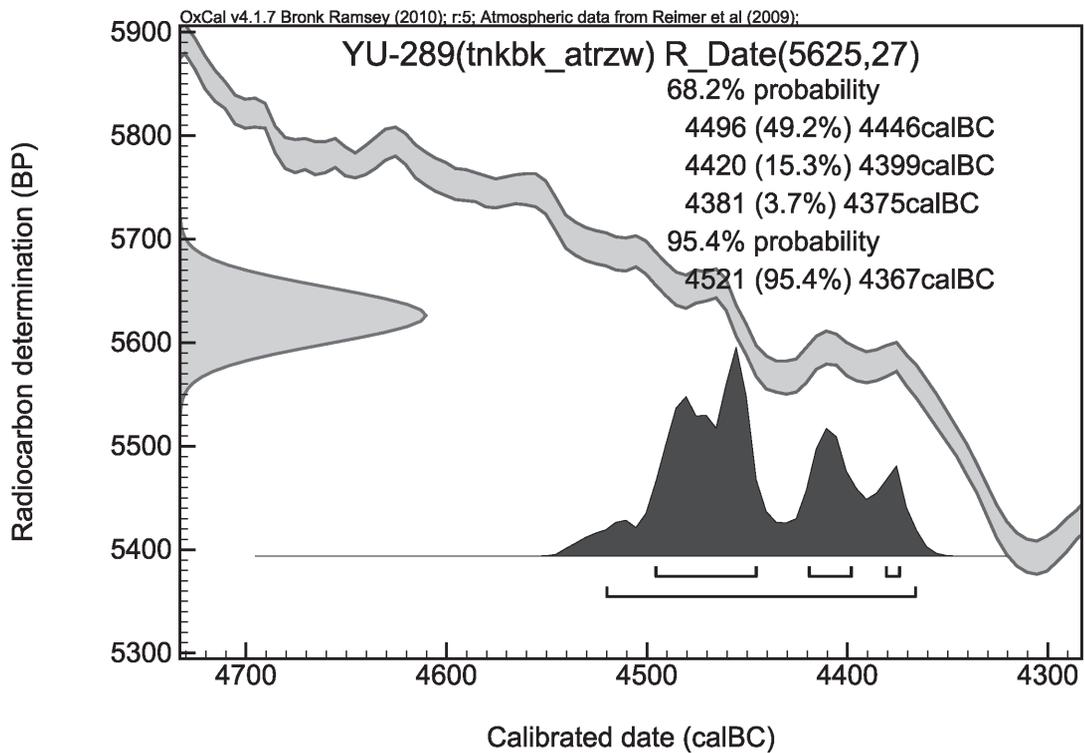
$^{14}\text{C}$  年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$  年代 (yrBP) の算出には、 $^{14}\text{C}$  の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した  $^{14}\text{C}$  年代誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその  $^{14}\text{C}$  年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

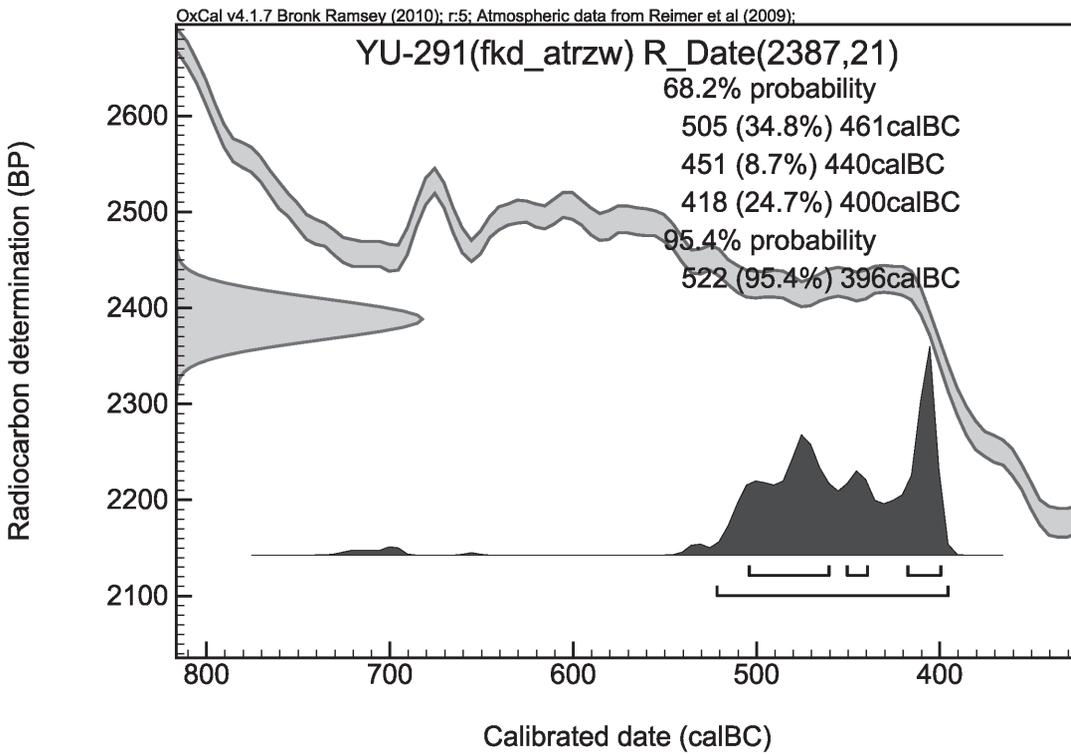
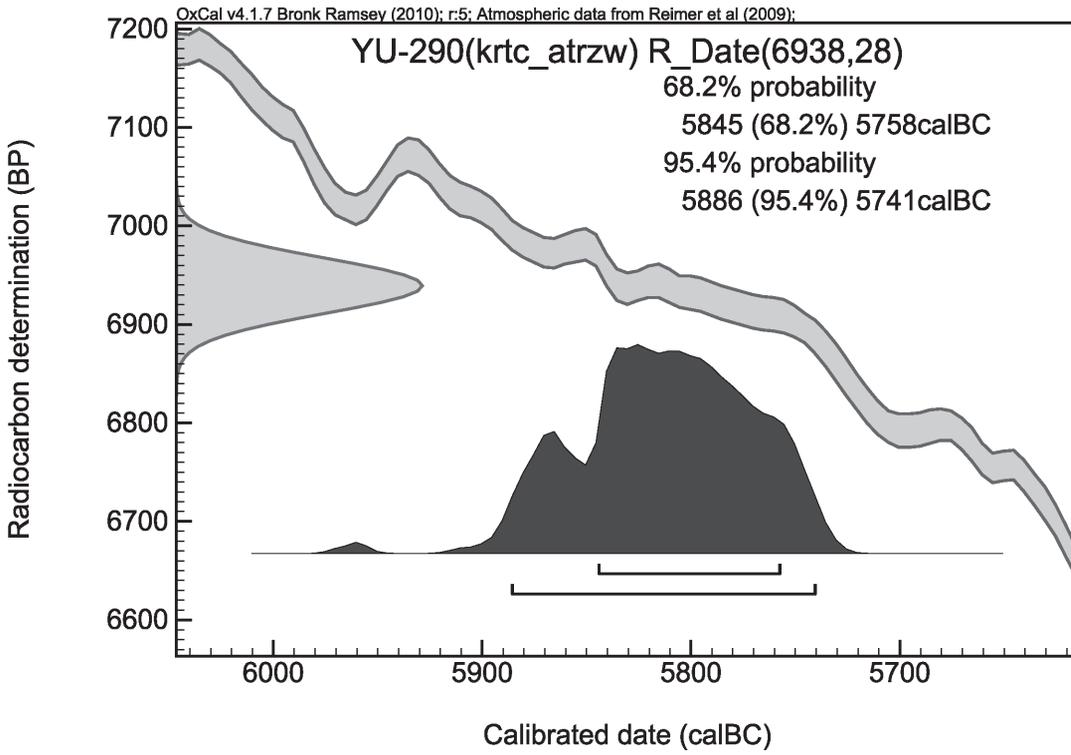
なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された  $^{14}\text{C}$  年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度の変動、及び半減期の違い ( $^{14}\text{C}$  の半減期 5730  $\pm$  40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。 $^{14}\text{C}$  年代の暦年較正には OxCal4.1.7<sup>1)</sup> (較正曲線データ: Intcal09<sup>2)</sup>) を使用した。なお、1  $\sigma$  暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された  $^{14}\text{C}$  年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2  $\sigma$  暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る

確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は  $^{14}\text{C}$  年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

参考文献

- 1) Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 2) Reimer, P. J., Baillie, M. G. L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Burr, G. S., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, I., Heaton, T. J., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., McCormac, F. G., Manning, S. W., Reimer, R. W., Richards, D. A., Southon, J. R., Talamo, S., Turney, C. S. M., van der Plicht, J., & Weyhenmeyer, C. E. (2009). IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon*, 51(4), 1111-1150







C1 調査区全景（南から）

写真図版 1



B3 調査区立地状況（東から）

写真図版 2



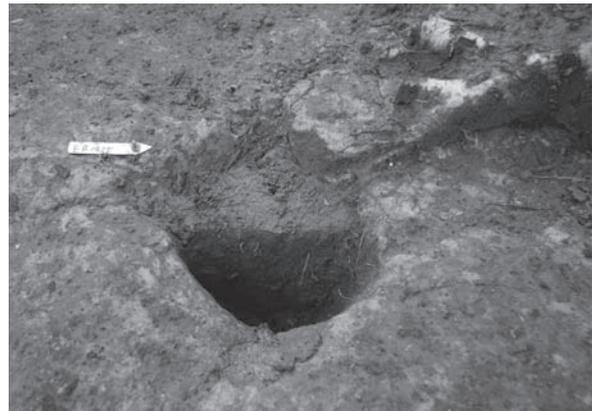
C1 調査区遺構検出状況（南から）



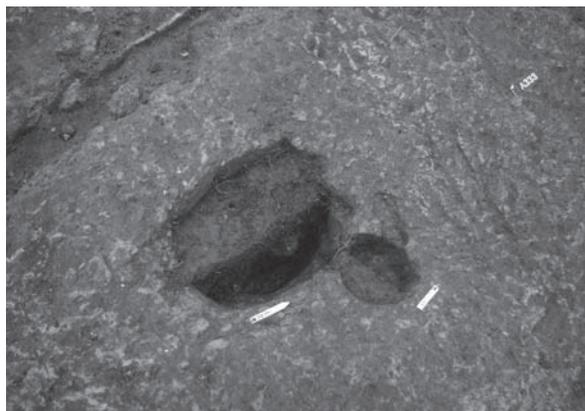
調査区南部 柱穴跡（西から）



SD1455、1456、1457（東から）



SD1425（東から）



SD770、1458（南から）



西側トレンチ（南西から）

C1 調査区写真



1 TSD1401 (西から)



1 TSD1401 検出状況 (北から)



2 TSD1403、SD1404 (南から)



2 TSD1405 (西から)

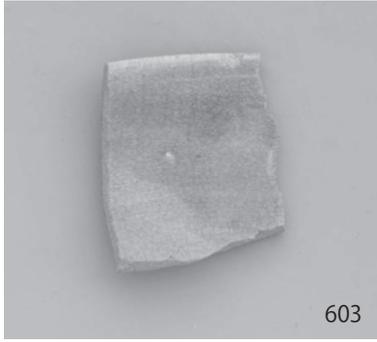


2 T2 ~ 4 区 SD1402、SD1405 検出状況 (南から)



3 T 丘陵下部平坦面 (北から)

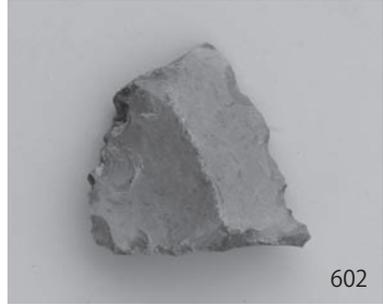
B3 調査区写真



603



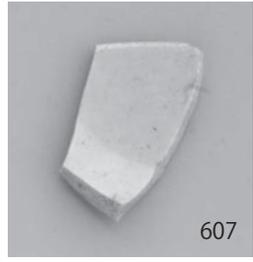
604



602



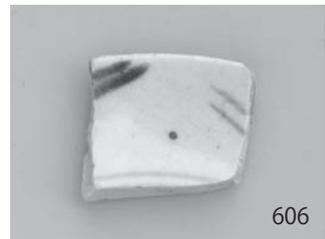
601



607



605



606

平成 23 年度調査出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	あてらざわたてやまじょうあとちょうさほうこくしょ							
書名	左沢楯山城跡調査報告書(12)							
副書名	史跡左沢楯山城跡第1期保存整備に伴う確認調査報告書(1)							
シリーズ名	大江町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	菊地 泰子							
編集機関	大江町教育委員会							
所在地	〒990-1163 山形県西村山郡大江町大字本郷丁373-1 TEL 0237(62)3666							
発行年月日	2012年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
あてらざわたてやまじょうあと 左沢楯山城跡	やまがたけん にしむらやまくん 山形県西村山郡 おおえまち おおあざ あてらざわ 大江町大字左沢	06324	031	38° 23' 05"	140° 13' 00"	20110801 ～ 20110831	142m <sup>2</sup>	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
左沢楯山城跡	城館	中世～近世	掘立柱建物跡1、溝跡 5、柱穴跡	磁器、陶器	八幡座地区C1調査 区で2間×2間の掘 立柱建物跡を検出し た。			
要約	<p>左沢楯山城は五百川峡谷から村山盆地に最上川が流れ出る場所に位置する。左沢は伊達氏が支配した置賜地方と、村山地方の間における交通の要衝であった。城は正平年間、左沢(大江)元時が築城したとされ、「村山地方の中世から近世に至る動向を知るうえで貴重な城跡である」として、平成21年国史跡の指定を受けた。大江町は平成23年から保存整備を目的とした発掘調査を計画し、本書はその1年目の概要を報告した。</p> <p>城は自然の沢(蛇沢)を取り込んだ構造で、東西約480メートルの規模である。今回の調査は「八幡座」と呼ばれる曲輪と蛇沢で実施した。</p> <p>「八幡座」は蛇沢北側の丘陵に位置する。楯山の最頂点を占めるが、面積が120m<sup>2</sup>程度と小規模な曲輪である。過去に調査が行なわれており、今回は平坦面と虎口を想定した場所に調査区を設け、2間×2間の建物跡と東西に並ぶ柱穴跡などを検出した。遺構の性格と年代の検討が、今後の課題である。</p> <p>蛇沢沿いは、沢に直交するトレンチを3カ所設定した。東側の1Tでは、沢に平行する布堀状の遺構と平坦面が検出されており、周辺の曲輪との関係を考慮して性格を検討する必要がある。中央の2Tでは、古い蛇沢の跡が検出された。遺物は17世紀の美濃と肥前の磁器片などが出土したが、沢に流れ込んだものとみられる。</p>							

# 文 献

- 大江町教育委員会編 1984『大江町史』  
山形県 1986『土地分類基本調査』「表層地質図」  
金山 耕三 1996「左沢御領内御絵図」『西村山郡の歴史と文化Ⅲ』  
家田 淳一 2002「Ⅱ肥前（佐賀県）の製品について 陶器の編年 2 播鉢・鉢・片口・水指・茶入・土瓶・水注・灯火具」『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会 10 周年記念』  
市村 高男 2002「中世出羽の海運と城館」『中世出羽の領主と城館』高志書院  
大場 雅行 2002「出羽南部の城館」『中世出羽の領主と城館』高志書院  
川崎 利夫ほか 2002『左沢楯山城跡調査報告書（6）』  
中野 雄二 2002「Ⅲ肥前（長崎県）の製品について 波佐見」『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会 10 周年記念』  
野上 建紀 2002「Ⅱ肥前（佐賀県）の製品について 磁器の編年 1 碗・小坏・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会 10 周年記念』  
財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター編 2003『江戸時代の美濃窯』47-55 頁  
伊藤 清郎ほか 2007『左沢楯山城跡調査報告書（9）』  
伊藤 清郎 2007「Ⅴ考察 5 成果と課題」『左沢楯山城跡調査報告書（9）』  
川崎 利夫 2007「Ⅴ考察 1 出土遺物から見た左沢楯山城跡」『左沢楯山城跡調査報告書（9）』  
北畠 教爾 2007「Ⅴ考察 3 文献からみた左沢楯山城跡」『左沢楯山城跡調査報告書（9）』  
日下部 美紀 2007「Ⅳ 遺構と遺物」『左沢楯山城跡調査報告書（9）』  
宮本 長二郎 2007「Ⅴ考察 2 左沢楯山城跡の建造物」『左沢楯山城跡調査報告書（9）』  
上田 美紀 2008『左沢楯山城跡』  
阿子島 功 2010「Ⅲ 史跡とその周辺の環境 1 自然環境（1）地理・地形・地質」『史跡左沢楯山城跡保存管理計画書』  
渋谷 孝雄 2012「第4章歴史的特性 第1節平安時代以前の大江町」『大江町と最上川の流通・往來の景観保存調査報告書』

2012年3月30日 発行

## 左沢楯山城跡調査報告書（12）

大江町埋蔵文化財調査報告書 第14集

史跡左沢楯山城跡第1期保存整備に伴う確認調査報告書（1）

発行者 山形県西村山郡大江町大字本郷丁 373 - 1  
TEL 0237 (62) 3666  
大江町教育委員会  
印刷者 山形県寒河江市中央工業団地 58  
寒河江印刷 株式会社